

関山

かんざん

第29号



Image : TNM Image Archives

寺報 中尊寺



東京国立博物館 特別展本館 行列を成して
(令和6年2月10日)



金色堂内陣



春の藤原まつり開幕 藤原四代公追善法要 (令和5年5月1日)



天の邪鬼 (記事40ページへ)



狂言「文荷」(令和5年8月14日)
野村万作師はこの年文化勲章を受章



今年も地元園児による「謡」(令和5年11月3日)
平泉二葉きり園の園児24名元気よく。

おん ぶんびょう どう 怨親平等

— 金色堂建立九百年によせて —

中尊寺 貫首 奥山元照

令和六年(二〇二四)は奥州藤原氏初代藤原清衡公が中尊寺に金色堂を建立され、九百年の節目の年となります。一月二十三日より四月十四日まで東京国立博物館にて、建立九〇〇年特別展「中尊寺金色堂」を開催、中尊寺讚衡蔵においても特別展示「金色堂の信仰と継承」が開催され、その後も関連記念行事が予定されております。

平安時代の末、奥州藤原氏は百年に亘り平泉を府として、みちのく奥羽全土に「平和都市・浄仏国土」を建立したのでした。

本年は、奥州藤原氏の示された「抜苦与楽 普皆平等」の精神を敷衍ふえんしていくことの思いを新たにしなければならぬと思います。

この四年間の不安な日々を改めて振り返り、コロナ感染症で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、

ご遺族にお悔やみを申し上げますとともに、後遺症に苦しむ方々の一日も早いご回復を祈念致します。
また、一月一日に発生しました能登半島地震で亡くなられた方々に哀悼の意を捧げ、被災された皆様
様に心よりお見舞いを申し上げます次第です。

海外では、長期にわたりロシアによるウクライナ戦争、イスラエル、パレスチナでの紛争が続き、
その解決の糸口も見えず、その影響が諸外国にも出始めて複雑化している様相を示し、連日心が痛む
映像が報道されていることは悲しみの限りであります。

天台宗では、一九八七年より毎年日本の主なる宗教指導者を結集して比叡山宗教サミット「世界平
和祈りの集い」を開催しています。その始まりは、一九八六年にローマ教皇ヨハネ・パウロ二世陛下
の呼びかけによりイタリア・アッシジで開催されたものでした。そして昨年九月のドイツ・ベルリン
の開催で三十七回を数えました。

その「世界宗教者平和の祈りの集い」に出席された、妙法院門跡杉谷義純御門主の分科会でのご発
言「世界平和実現のために価値ある宗教間対話」の後半一節をご紹介します。

「対話は真の平和の実現のためには、欠くことのできない作業ではありますが、それはいつも大きな
困難を伴います。そしてそのためには、いつも心を配り周到な準備と勇気が必要です。ここでまず
宗教対話の環境を整えることが必要ですが、そのためには次の三要素を欠くことができません。

(一) 対等であること

(二) 相手に敬意を持つこと

(三) 相手に無知であつてはならないこと

そして当初はどうしても自分達との違いを認識しがちですが、違いを認めながら共通点を探す努
力が必要です。(中略)

そのためには立場が異なると思われる相手、又は、自分にとって正義と思われない相手であつて
も常に対話を拒まず、対話の窓口を開いておく必要があるでしょう。(中略)

対話とは世界を変え、世界を癒すためにあるのです。そのためには対話する以外に道はありません。
と述べられています。

平和のための対話を行うには、心を高めて全てのを包み込む祈りが必要になります。十二世紀
の始め、清衡公は当時の最高の工芸技術を駆使して、その祈りを生み出すひかりの世界を金色堂に具
現されました。そして、このみちのくに浄仏国土を実現するために、中尊寺を建立されたのです。

宗祖伝教大師の「怨みをもつて怨みに報ゆれば 怨みは止まず 徳をもつて怨みに報ゆれば 怨み
はすなわち尽く」のお言葉にありますように、高貴な祈りを以て心を高めて対話を進めていくことが
必要です。対話し続けることは、一見敵対するものが実は自分たちと変わることのない、まったく同
じ存在であることに気づく道であることに、あらためて思いを致すのであります。



貫首揮毫

「建立九〇〇年

中尊寺金色堂」展の開催

浅見龍介

はじめに

中尊寺金色堂の棟木（屋根の一番高いところで水平に置かれる部材）に天治元年（一一二四）八月二十日に上棟（棟木を取り付けること）したと記されています。上棟の後、内部の荘厳にかなりの時間がかかったはずで完成は数年後と考えられますが、その年次は知られません。今年の上棟から九〇〇年という記念の年で、中尊寺、東京国立博物館、NHK、NHKプロモーションが主催となり、一月二十三日から四月十四日まで東京国立博物館で特別展を開催することになりました。「上棟」という言葉が一般にはわかりにくいため、「建立九〇〇年 中尊寺金色堂」を展覧会名称にしま

した。ここにその開催に至る経緯と意義などについて記します。

これまでの中尊寺諸仏の展覧

金色堂の仏像が中尊寺の外で拝観された最初は、おそらく宝永元年（一七〇四）江戸における出開帳です。堂内諸仏は修理が必要な状況だったため、仙台藩の許可を得て、天台座主、寛永寺貫主（住職）を兼務していた公弁法親王（後西天皇の第六子）の取次で実現しました。江戸までの運搬は自己負担、像は「三尊阿弥陀」と記すだけなので、詳細は不明です。出開帳の収益とは別に、桂昌院（徳川家光の側室、綱吉の母）から「六地藏御修復料」として五十両を拝領したと『護持院日記』に記録されています。

その後、中尊寺所蔵の宝物がまとまって展示された展覧会は、昭和三十七年（一九六二）三月三日から二十一日まで開催された「藤原清衡公生誕九百年慶讃 中尊寺秘宝展」があります。主催は中尊寺と朝日新聞社、後援は文化財保護委員会（文

化庁の前身)、奈良国立博物館、岩手県、会場は名古屋市栄町にあった丸栄百貨店八階大ホールでした。今ではデパートの催事場で国宝、重要文化財を展示することはできませんが、昭和四十八年十一月に発生した熊本県の大津デパート火災以前は、盛んに利用されていました。

昭和四十年三月二十七日から四月十一日まで「国宝金色堂大修理新覆堂落成記念 中尊寺秘宝展」が仙台の丸光百貨店八階大ホールで開催されました。主催は中尊寺と河北新報社、河北文化事業団、後援は文化財保護委員会、宮城県、岩手県、仙台市、両県教育委員会、仙台市教育委員会、東北放送、NHK、仙台放送です。金色堂の仏像は三壇の観音菩薩と地藏菩薩立像と中央壇の持国天像合わせて七軀と金色堂内具、棺と副葬品などが出品されました。現在讚衡蔵に安置されている丈六薬師如来坐像が出ていて驚きます。

昭和四十二年二月二十六日から三月二十一日まで「中尊寺秘宝展」が京都市美術館で開催されました。主催は中尊寺、京都市、京都新聞社、後援

は文化財保護委員会、岩手県、京都国立博物館、奈良国立博物館です。金色堂の仏像は三壇の観音菩薩立像と地藏菩薩立像の各一軀ずつ計六軀、堂内具以下は同様です。丈六の阿弥陀如来・薬師如来坐像が出ています。

昭和四十三年二月三日から二十七日まで「みちのくの秘宝 中尊寺展」が東京新宿の小田急百貨店で開催されました。主催は中尊寺、東京新聞社、東京中日新聞社で、後援は文化財保護委員会と東京都教育委員会です。金色堂の仏像は西北壇のすべてと、中央壇、西南壇の観音菩薩と地藏菩薩立像が各一軀の計十五軀、が出品されました。のみならず、須弥壇のうち中央壇および西北壇の前面は上下櫃、束、格狭間、八双金具が出品されています。

図録の巻頭に掲載された当時の中尊寺貫首今東光氏の文章中に「この展覧会が終わると、直ちに五月の金色堂の落慶供養を営むことになる。これ等の文化財が金色堂に納まったら、もう当分、中尊寺展を開くことはあるまいと思う。」と書かれ

ています。その言葉どおり、四半世紀は金色堂諸仏の展覧会出品はなかったようです。

長く動くことのなかった金色堂諸仏が次に出品される機会は、平成五年(一九九三)から翌年にかけて四会場(仙台市博物館、福岡市博物館、サントリー美術館、岩手県立博物館)で開催された「中尊寺黄金秘宝展―奥州平泉文化の全貌」でした。この年のNHK大河ドラマ「炎立つ」(七月四日〜翌年三月十三日)が奥州藤原氏をテーマにしたものだったため、これを契機として企画が持ち上がり、中尊寺、毛越寺、NHK、岩手県、平泉町、NHK東北プランニングで実行委員会を構成して運営されました。展覧会の構成は、「平泉文化の源流」として中尊寺に先行する仏像等十三件、「奥州藤原氏の栄華」では平泉周辺の遺跡からの出土品、絵巻等六十件そして「中尊寺の秘宝」四十四件です。

金色堂の仏像は各会場五軀ずつでその内訳は以下のとおりです。

仙台市博物館(八月二十八日〜十月三日)

岩手県立博物館(六年一月十四日〜二月十三日)

観音(西北壇)、勢至(西南壇)、地藏(西北・西南壇各一軀)、持国天(西北壇)

福岡市博物館(十月十四日〜十一月十四日)
サントリー美術館

(十一月二十三日〜十二月二十六日)

観音(西南壇)、勢至(西北壇)、地藏(仙台・岩手とは別の西北・西南壇各一軀)、増長天(西北壇)

二会場ずつで作品を入れ替えているのは、国宝・重要文化財に指定されている作品の展覧会出品は、年間二会場六十日までという文化庁の指導があるためです。

入場者数は、仙台市博物館七万一千四十一人、福岡市博物館五万八千六百二十八人、サントリー美術館四万六千八百七十人、岩手県立博物館四万九百五十四人で合計二十一万七千四百九十三人のほりましました。

次に平成二十年(二〇〇八)から翌年にかけて三会場(仙台市博物館、福岡市博物館、東京・世

田谷美術館)で開催された「特別展 平泉―みちのくの浄土」があります。これは展覧会名称の前に「世界遺産登録をめざして」と付されていますが、『関山』十五号(平成二十一年二月)掲載の破石澄元氏の報告によると、世界遺産登録を記念して開催する予定でしたが、登録延期となったため、「めざして」に変えたそうです。いずれにしても世界遺産登録については地域の積極的で熱心な活動を要求されたので、この展覧会の盛況が高評価に繋がったでしょう。主催は中尊寺、毛越寺、岩手県、平泉町、奥州市、一関市が三会場共通、NHK各地の放送局、地元の新聞社(仙台は河北新報社、九州は西日本新聞社、世田谷美術館には新聞社なし)が加わりました。展覧会の構成は、プロローグ「浄土空間・平泉」浄土図、平泉古図など十四件、第一章「みちのくの古代・みちのくの仏たち」中尊寺以前の仏像十五件、第二章「仏都平泉―みちのくの中央・朝日差し夕日輝く―」で平泉周辺出土品、金色堂以外の仏像、絵図等百件、第三章「輝きの浄土―中尊寺の至宝」で金色

堂西北壇諸仏十一軀、堂内具、華鬘等三十七件、第四章「祈りとまつり」五十二件です。

この第三章に中尊寺金色堂の仏像、堂内具などが展示されました。西北壇の阿弥陀三尊、地藏六軀、二天王像がそろって出品されたのは昭和四十三年以来四十年ぶりです。世界遺産は不動産を対象にしており、仏像等の美術工芸品は関係ありませんが、金色堂をはじめとする中尊寺伽藍は中核をなすので、世界遺産登録に向けた国内の機運醸成にこの展覧会は大きく貢献したと思われます。

会期中の入場者数は、仙台市博物館六万五千五百十六人、福岡市博物館五万三千六百二十四人、世田谷美術館八万八千九百人、合計二十万六千八百四十九人でした。

この展覧会で三会場とも金色堂の西北壇の十一軀が揃って展示されたことは特筆すべき出来事です。そしてその展示方法も、壇上の安置状況を忠実に再現して一台のケース内に展示したことが注目されます。破石澄元氏によると「本展では彫刻の展示というより、尊像の安置ということに重き

を置いて取り扱うことに留意(破石澄元「特別展 平泉 みちのくの浄土」『関山』十五号)したということです。

一方、東京国立博物館における中尊寺金色堂関係の展示は、現在も宝塔曼荼羅二幀を御寄託いただいています。かつては迦陵頻伽文華鬘もお預かりしていました。現在は返却し、讃衡蔵で展示されています。中尊寺経と呼ばれる紺紙金銀字および紺紙金字一切経はその多くが豊臣秀吉によつて持ち出され、高野山金剛峰寺をはじめとする寺院に奉納されましたが、そのうち、紺紙金銀字大唐西域記十二巻が当館の所蔵となっています。

模写・複製も所蔵しています。金色堂堂内で使用された仏具のうち、迦陵頻伽文華鬘、螺鈿平塵案(机)です。経蔵の八角須弥壇もあります。また、金色堂の荘厳の明治時代の状況を詳細に写した模写図も所蔵しています(その一部を一月から四月半ばまで讃衡蔵で展示します)。

最近、東京国立博物館の特別展で金色堂の仏像

をお借りしたのは、平成十一年(一九九九)平成館開館記念の特別展「金と銀」です。西北壇から持国天・增長天、西南壇から観音菩薩、地藏菩薩像の四軀にお出ましました。

中尊寺金色堂の上棟八五〇年に当たる昭和四十九年(一九七四)には展覧会等は行なわれていません。前述したとおり、金色堂の修復が完了して六年で、参拝客を迎えることを大事にしたいでしょう。

東北自動車道の岩槻から一関への開通は昭和五十三年(一九七八)でそれ以前のトラック輸送には相当の時間を要したでしょう。東北新幹線の大宮―盛岡間の開業が昭和五十七年、三年後に上野、さらにその四年後に東京駅まで延びました。在来線の特急に比べ、およそ半分の時間で到達できることとなり、これによつて東北を訪れる旅客は飛躍的に増加しました。平泉町の旅客数は、昭和四十三年の金色堂修理完成の年に初めて百万人を超え百十六万四千三百人に達しました。これは名古屋、京都、新宿で行なつた展覧会の効果で金色堂

の認知度が上がったことも貢献しているでしょう。翌年は百万人を割るものの、昭和四十五年以降は百万人以上を保持しました。平成元年から令和元年までは百五十万人以上で推移しました。今も最高記録となっている昭和六十一年（一九八六）の二百六十六万三千人は弁慶の八百年遠忌に加え、前年に東北新幹線の始発駅が上野となったこと、好景気で生活が豊かだったことによると考えられます。

平成元年（一九八九）から六年までは二百五十万人前後で、五年にNHK大河ドラマ「炎立つ」の放映、そして「奥州平泉文化の全貌 中尊寺黄金秘宝展」が仙台、福岡、東京、盛岡で開催されたことが景気の後退でも旅客数を保持するのに効果があったのでしょうか。

ところが令和二年に発生した新型コロナウイルスの世界的な流行を受けて観光は停止を余儀なくされ、二年、三年は百万人を割りました。四年には百万人を超え、回復傾向にあります。また最盛期には及びません。

「建立九〇〇年 中尊寺金色堂」開催の経緯・経過と意義

今回の展覧会は、金色堂建立九〇〇年という記念の年に展覧会を開催したい、というNHKからの申し入れを受けて検討を始めました。開催時期は二〇二四年の一月からということで、すでに当館の特別展会場である平成館は予定が入っていたため、本館特別五室での開催が前提となりました。これまで東京では古くは小田急百貨店、近年ではサントリー美術館、世田谷美術館で展覧会が開催され、当館が中尊寺の展覧会を行なったことはなため、ぜひとも開催したいところで、希望出品リストを作成し、中尊寺とご相談したうえで館内の会議に諮ることにしました。

最初に中尊寺を訪問したのは令和四年三月二十八日。それ以前にNHK、NHKプロモーションと企画書および出品希望リストを作成するための打ち合わせは行なっていました。この時、三月十六日に発生した福島県沖地震によって、東北新幹線の福島駅―白石蔵王駅の間で東北新幹線が脱線

し不通、開通が四月二十日頃になるということでした。展覧会だけでなく、8KCGのための撮影、制作という案を抱えており、その撮影については出来る限り早く見通しを立てたいという事情もあつて、飛行機で仙台空港まで行き、仙台から一関はバスという行程で予定通り第一回の協議を行いました。その後は五月十一日、六月二十四日、八月十九日の三回で会期と中央壇十一軀をはじめとする出品リストの骨格が決まりました（確定は九月）。十月十二日には中尊寺の貫首、執事長、管財部長、同副部長が東京国立博物館にご来館、会場となる部屋をご覧いただきました。

十月二十四日は京都に移転した文化庁に行き、展覧会の会期が十二週間八十四日で指定品の展示制限を超えることについて事情を説明、了承を得ました。十一月十四日8K撮影のスケジュールについて相談、同二十五日は展覧会の会期に合わせて開催する金色堂に関する子ども向けの展示について当館の担当者と説明しました。同日、文化庁の調査官とともに金色堂の壇上にのぼって中央壇

の十一軀の保存状態をチェックし、持国天像の漆箔の浮きを押さえる必要があることを確認しました。

令和五年は一月二十五日から一週間で金色堂の8K撮影を実施、堂内、特に壇上と仏像、高欄を清掃しなければならぬため、一月十日に当館保存修復室の研究員を伴い、作業のための下見をしました。映像の精度が高いため、埃も映ってしまうのです。

一月二十五日から二月二日までの8K撮影についての詳細はNHKの国見氏の原稿に詳しく書かれると思います。午後五時の拝観時間終了後から開始するのでどうしても夜間の作業になります。撮影の前に三十三軀すべての像を壇から降ろしてガラスの外に出し、まず壇上、高欄の清掃、次に像の清掃を行いました。像の移動は日本通運美術品事業所の作業員四名、移動の監督、撮影の立ち会いのため、当館研究員四名が参加。清掃は当館保存担当者三名が行い、清掃終了後NHKの8K撮影を二班体制で実施。さらにNHK特集で放映

するための番組スタッフも来たので、大人数になりました。中尊寺管財部の三浦部長（当時）と破石副部長（当時）には連日の夜間作業にお立ち会いたいただき大変恐縮なことでした。なお、この時以降、展覧会については当館の特別展担当（ワーキンググループ）が窓口になり、私の出番は少なくなりましたので、この後の作業については日録をご参照ください。

三月二日には展覧会の広報の相談のため、当館学芸企画部広報室長と中尊寺を訪問。菅野澄円総務部長（当時）と面談。七月上旬に記者発表会を開催することを確認しました。

四月十三日にポスター、チラシのデザインコンペのための説明会を行い、四人のデザイナーに声を掛けてデザイン案制作を依頼。五月十二日にプレゼンテーションを行い、当館、NHK、NHKプロモーションの担当者が相談して現在の案を有力候補として、菅野管財部長に連絡、寺内の了承を取っていただきました。

六月一日は、子ども向けの展示で、金色堂中央

壇の中央格狭間に表わされた銅製孔雀の複製を製作してもらうことに決まった中村氏、監修の大正大学教授加島勝氏とともに孔雀の熟覧をさせていただきます。

六月十三日から十七日まで、図録用の写真撮影をしました。金色堂の諸仏は中央壇の十一軀が対象ですが、デジタルデータを同時に揃えた方が良いので、三壇三十三軀の撮影を日々拝観終了後に行いました。

七月四日は東京国立博物館大講堂で記者発表会を実施。中尊寺奥山貫首、菅原執事長、菅野管財部長が来館。貫首にご挨拶いただき、当館から展覧会の内容について説明しました。

八月三十一日には親と子のギャラリーでお借りする予定の金色堂模型の確認、展覧会期間中に讃衡蔵で展示する予定の当館所蔵の金色堂模写（修復前の様子を写したもの）の展示台設計のため、当館のデザイナーとともに訪問。

リストが固まった九月以降、会場展示図面の検討を始めました。中央壇十一軀をどのように展示

するかが大きな課題でした。展示が十二週間に及ぶことについて文化庁の了承を得る時に、ケース内展示が条件だったので、すべてをケース内展示とすることは決まっていました。「平泉 みちのくの浄土」展では前述したとおり壇上の配置を再現していましたが、今回は中央壇の仏像がよく見えるように展示したいと考えました。平安時代十二世紀の制作年代がわかる貴重な像であり、間近で拝観する機会は二度と得難いのです。

中央壇は拝観の方々の視線が注がれ、もともと目立つ場所なので、昭和四十三年以降は展覧会に出ることはありませんでした。この中央壇の像を揃って展覧会場でじっくり観察できるのが今回の展覧会の大きな意義です。展示ケースの透明度、照明器具、技術など昭和四十年代とは全く違います。次に金色堂の原寸大の8K映像がモニターに映し出され、あたかも金色堂に入るような体験ができるのが貴重です。

菅原執事長からお聞きしたお話では、金色堂を拝観する方々は、ガラスの前で説明のテープを聞

き終わるとすぐに出て行ってしまふ。金色堂の本当の素晴らしさが、ガラスに隔てられて伝わりにくい点が課題である、ということでした。とは言え、ケース内に入れるようにはできません。そこで、8Kの映像に対する期待は大きいのです。堂内に入ったかのように諸仏、須弥壇、巻柱の荘厳が鮮明に見えますから、金色堂の素晴らしさに感動し、平安時代の奥州文化の質の高さに驚くでしょう。

今回撮影した映像は展覧会終了後、中尊寺の拝観客に向けて活用されることと思います。金色堂の真価が拝観の方々の脳裏に焼き付くことと思います。

親と子のギャラリー「中尊寺のかざり」

— 博物館の社会的役割

博物館は古くて貴重なものを収集、保管、修復、展示、調査研究する施設であり、一般の人々の生涯学習の場となります。その対象は、かつては児童、学生、社会人でしたが、近年未就学の幼児あ

るいは乳児を連れ親子にも対応するのがあたりまえになってきています。 障碍者にもバリアフリーが当然であり、目の見えない人々にも鑑賞の機会を設ける工夫が開発されています。この十年ほどで飛躍的に増えた海外からの観光客についても同様です。加えて、令和五年に改正施行された博物館法では、以下の役割が付加されています。

「博物館にある地域の財産は、その価値をしつかりと発信することで人々の地域への誇りや愛着を深めるだけでなく、その土地や地方の魅力を外に発信し、観光で訪れる人々にも感動を与え、地域の経済や振興に役立つ取り組みが進められています。今回の改正では、国立の指定施設に我が国の博物館活動のナショナルセンターとしての役割を求める条項を明記することとなりました。」

(文化庁 博物館総合サイト)。

今回の親と子のギャラリーでは、金色堂中央壇格狭間の孔雀の制作工程模型とハンズオン用の完成品の制作、金堂模型の輸送等の経費を日本博の助成金でまかさないです。日本博は「インバウンド

需要、国内観光需要の一層の喚起を目指」(文化庁 日本博サイト) すもので、この親と子のギャラリー「中尊寺のかざり」でも金色堂の螺鈿、銅板鍛造と彫金の技法をわかりやすく展示して金色堂のすごさを子どもから大人まで広く知ってもらうことを目的としています。

さらに、特別展と合わせて通訳案内士を招いての解説会を行い、中尊寺観光に海外からの観光客が増加した場合の対応を可能にする取り組みをします。

須弥壇格狭間の孔雀のハンズオンは、中尊寺でも活用していただけるようにと考えています。

以上のような取り組みを通して、金色堂の存在が世界に広く知られ、国内外の観光客が中尊寺を目指してその価値を認識できるよう、国立博物館として努めたいと考えています。

あさみ りゆうすけ

東京国立博物館 副館長

浄土の花ひらく平泉

金色堂建立九〇〇年

菅 原 光 聴

明治三十年(一八九七)に行われた金色堂修理の際、屋根裏の部材である棟木に墨書が発見されました。この墨書により、金色堂は天治元年(一一二四)八月二十日、藤原清衡公によって建立(上棟)されたことが明らかになりました。

本年・令和六年(二〇二四)はそれからちょうど九〇〇年に当たります。

金色堂棟木墨書銘



棟木には清衡公に続いて三人の女性の施主が「女檀」(女性の施主)として列記されています。

一人目は「安部「倍」氏」、これは清衡公の母、『吾妻鏡』に「有加一乃未陪」と伝えられる女性を指すと思われる。有加は陸奥奥六郡の俘囚長・安倍頼時(旧名頼良)の娘で、陸奥国の在庁官人であり秀郷流藤原氏につらなる藤原経清と結婚します。その後、安倍氏が奥六郡の南端・胆沢郡から衣川以南の陸奥国府管轄域に勢力を伸ばすと、国府軍との間で前九年の戦いが勃発します。経清は安倍氏の娘婿という立場で謀叛の嫌疑をかけられることをおそれ、安倍氏とともに戦うことを決意します。しかし、この戦いで安倍氏は敗れ、経清は斬首に処せられたのです。清衡公七歳の時でした。有加は幼い清衡公を伴って出羽国の豪族・清原武貞に再嫁し、清原一族に連なって清衡公を守ったのです。

二人目は「清原氏」、清衡公の先妻と考えられます。

清衡公は、継父武貞のもと、継兄の真衡、異父弟の家衡とともに成長します。しかし武貞の死後、真衡が家督を継ぐと、一族の内紛が勃発し、それに陸奥守・源義家が介入して後三年の戦へと発展します。真衡の死後、所領を巡っ

て反目した家衡によつて館を攻撃され、清衡公の妻・清原氏は子や一族とともに殺されてしまいます。

三人目は「平氏」、金色堂建立に立ち会った当時の正妻と考えられます。

奇しくも後三年の戦いを生き残つて奥六郡を伝領した清衡公は江刺郡豊田館から南進して衣川を越え磐井郡平泉に居を移します。そして衣川南岸の関山に中尊寺の堂塔を造立したのです。そこは「官軍」(朝廷方)と「夷虜」(安倍・清原氏)の勢力とを隔てる境界であり、清衡公が生まれ持つ二つのルーツを隔てなく供養する最適の場所でした。

正妻・平氏は清衡公の後半生を支え、六男三女をもうけて清衡公と共に金色堂上棟の日を迎えたのです。

清衡公は秀郷流藤原氏の系譜につらなる経清の子であると同時に安倍氏であり清原氏でもありました。金色堂上棟の日、清衡公はその棟木に藤原の名と共に亡き安倍・清原の名、そして平泉における自身の祈りを支えた平氏の名を明記したわけです。

金色堂建立の二年後、中尊寺伽藍の落慶供養が厳修されました。清衡公の作善は、戦で失われた官軍夷虜・毛羽鱗介の隔て無き冤霊供養へと広がり、鎮護国家を標榜したその祈りは三世十方の諸仏へと覃んでゆくのです。亡き父母・妻子の救済、そして自身の救済は、三世十方の仏国土を浄める菩薩行へと昇華されたのです。

それから九〇〇年、中尊寺では藤原清衡公はじめ奥州藤原氏鑽仰の諸行事を計画しております。

現在開催されております東京国立博物館特別展「中尊寺金色堂」や中尊寺讚衡蔵特別展示「金色堂の信仰と継承」を皮切りに、金色堂上棟の日に当たる八月二十日には「建立九〇〇年慶讃法要」を予定しております。

藤原清衡公は平泉の地に金色堂を建立し、多様なものが多様なまま平等に平和を享受する浄土(仏国土)の花をひらかせました。そのころざしを今の世に伝え、発信していくことが私どもの責務であると存じます。

(執事長)

中尊寺金色堂の仏像構成

―特に六体地蔵像の意味―

菅野 成寛

はじめに

中尊寺金色堂の建立は、棟木の墨書銘から天治元年(一一二四)。藤原清衡と、その妻たちが供養した阿弥陀堂であった。

時は平安末期の十二世紀のことで、「阿弥陀堂の世紀」とも呼べるほど阿弥陀堂建築が大流行し、現在、判明する平安期の全一四四棟の阿弥陀堂のうち七五パーセントの一〇八棟が十二世紀のもので、実際はもつと多数が造営されたはずである。

そのうち僅かに遺存する平等院鳳凰堂(一〇五三年)と金色堂は平安仏教文化の到達点、その代表的な精華であったが、問題はそのことではない。金色堂には、余りにも謎が多すぎる。



一般的な阿弥陀堂にしては多すぎる十一体もの
仏像構成、堂内への遺体の安置、そして金色堂の
名称とも関わる堂全体を皆金色に装った点で何れ
も異例なくめであり、その謎は深まるばかりだが、
ここでは仏像構成の謎についてのみ述べる。

しかも、さらに謎は謎を呼ぶ。ここ数年來の探
索の結果、何と金色堂が中尊寺の他に二棟、存在
したことが新たに浮かび上がってきたのである。

一、平泉と京中および中国天台山の金色堂

中尊寺の金色堂 まず、中尊寺金色堂について
確実な史料から確認しておこう。

① 左は金色堂の上棟式の折、内部の棟木に墨書



天治元年 歲時 (申カ) 長一丈七尺
申辰 八月廿日 子 建立堂一字 大工物部清國
廣一丈七尺 大行事山口頼近 小工十五人 鍛冶二人
安部氏 平氏 (清衡室)

された銘文の全文である。そこには、「天治元
年 八月廿日、建立堂一字、(略) 大檀散位藤
原清衡、女檀 平氏・清原氏・安部氏」と明記
され、天治元年(一一二四)における堂供養(上
棟式)の施主は藤原清衡と妻・平氏ほかによる
もので、いまだ堂名は定まっていなかった。ま
た清衡の妻たちも施主であった点から、金色堂
はあくまでも藤原氏一族の私堂であったことも
判明する。

四年後に妻・平氏が供養した『法華経』の奥
書によれば、清衡の死は大治三年(一一二八)
七月十六日のことで、『平安遺文』題跋編一二
四(三号)、後に清衡が金色堂内に葬られたこと

から推せば、その落成も天治三年前後の頃かと
見られる。

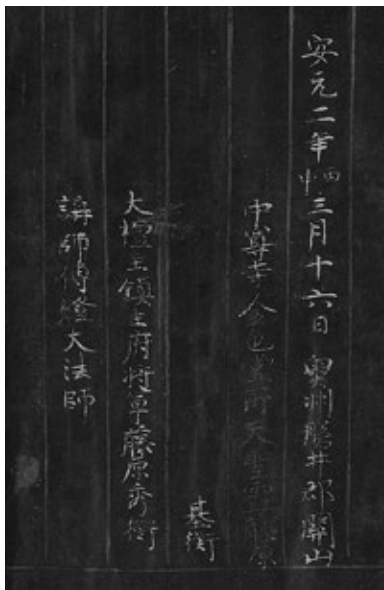
② 明らかに「中尊寺金色堂」として、確実な史
料のなかに登場するのは約五〇年後の安元二年
である。

これは鎮守府將軍時代の三代秀衡が、亡父・
二代基衡の菩提を供養した安元二年(一一七六)
銘の『法華経』の奥書(同二八〇八号)だが、こ
こには「関山中尊寺金色堂」と明記されて、既に
「金色堂」と呼称されていた下限年代が判明す

る(その上限は不明だが、あるいは落成時か)。

③ 次は鎌倉幕府の歴史書、『吾妻鏡』文治五年(一一
八九)九月十七日の中尊寺関係記事である。

関山中尊寺事、(略) 清衡(略) 草創之、(中略)
金色堂、上下四壁内殿皆金色也、堂内構三壇、
悉螺鈿也、阿弥陀三尊・二天・六地藏、定朝造之、
(関山中尊寺の事(略) 清衡(中略)之を草創す。
(中略) 金色堂、上下の四壁、内殿皆金色なり。
堂内に三壇を構ふ。悉く螺鈿なり。阿弥陀三尊・
二天・六地藏、定朝これを造る。)



安元二年^丙三月十六日 奥州磐井郡関山

中尊寺金色堂所天聖靈藤原

基衡

大檀主鎮守府將軍藤原秀衡

(守) 講師伝灯大法師

この記述は金色堂の現状と完全に一致し、右掲した①②③史料は、金色堂研究の第一級の史料として最重要かつ貴重なものである。

④ ところで二〇〇〇年代に入ると、金色堂の部に科学的な調査のメスが入った。木材の年輪年代学的な調査である。その結果、堂内の巻柱の一本(杉材)の年輪年代が一一一六年 \pm α 年、さらに以前に取り外されていた折上げ天井支輪板(ヒバ材)が一一一四年 \pm α 年の伐採年と判明し、①の棟木墨書銘(一一二四年)の年代と矛盾なく整合することが科学的に裏付けられた。

以上の史料①②③と資料④から、中尊寺金色堂は一一二四年に建立(正確には上棟)され、施主は初代藤原清衡と妻たち(平氏・清原氏・安部(安倍)氏)。「金色堂」との堂名は遅くも三代秀衡の時代には呼称され、堂内の安置仏は十一体(阿弥陀三尊・二天・六地藏像)、三基の須弥壇が構えられ、堂の内外が皆金色であった。

たことが史・資料上から確定される。
だが金色堂は、中尊寺のそれが唯一のものではなかった。

京中の金色堂 まず京の金色堂だが、九条家本の『延喜式』には左京図と右京図(巻四二)とが含まれ、この左京図のなかに「金色堂」が記述されている。

そこには「金色堂 中納言師長卿或」と墨書され、藤原師長の邸宅内に「金色堂」と呼ばれた仏堂が存在したことが知られる。本図によれば、師長の邸宅は左京八条二坊十二町に所在し、彼が中納言(正しくは権中納言)であったのは久寿元年(保元元年(一一五四)五六月)間であるから(『公卿補任』)、明らかに中尊寺金色堂の建立から三〇年後のこと。地理的にも二棟の金色堂は遠く隔絶し、まさか師長が清衡の中尊寺金色堂を意識し、それを堂名としたとは思えない(残念ながら堂内の安置仏はもとより、なぜ金色堂と呼称したかも不明である)。

中国・天台山の金色堂 もう一棟の金色堂は北宋時代の中国、天台山の山中に存在した。天台宗寺門派(園城寺)の成尋は撰闋家の護持僧も務めた天台の高僧であったが、その渡宋記録『参天台五臺山記』延久四年(一一〇七二)五月十八日の記事によると、天台山中の名所の一つ、石梁瀑布(石橋)付近に「金色堂、三面に十六羅漢の画像を懸く。」が存在した。

ここからは堂内に十六羅漢の画像を祀ったことだけは知れるが、しかしそれ以上は不明である。ただし一つ気になるのは、右の『吾妻鏡』の中尊寺記事のなかに、「凡そ清衡の在世三十三年の間、吾朝の延暦・園城・東大・興福等の寺より、震旦の天台山に至るまで寺毎に千僧を供養す。」として清衡と天台山との関わりを窺わせるが、今となってはその探究は困難である。ともあれここでは中尊寺の他に二棟、新たに金色堂の存在を知り得た点だけを指摘するに留めたい。

二、金色堂の仏像構成

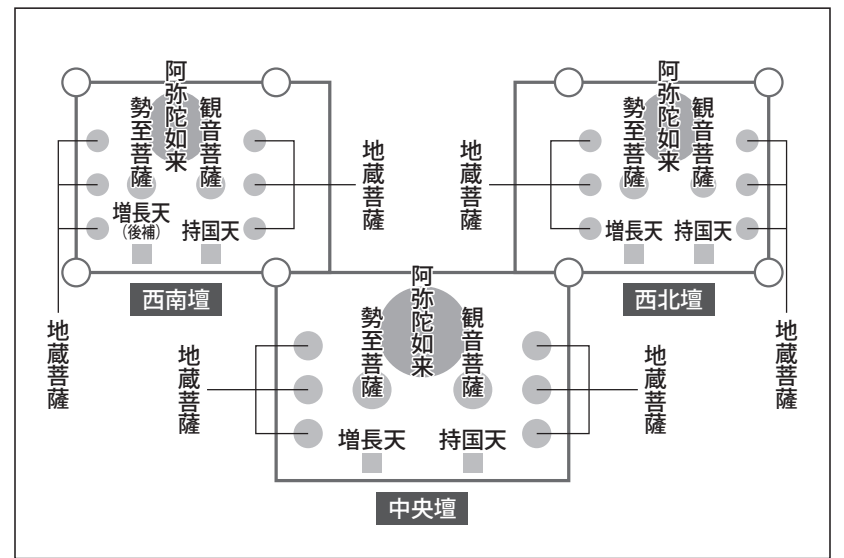
—六体の地藏像と二天像安置の意味—
阿弥陀堂の地藏像 阿弥陀堂としての金色堂だが、阿弥陀三尊像の他、地藏像六体を安置した点で類例がない。

現在知られる平安時代の阿弥陀堂での地藏菩薩像安置は一七例だが、金色堂を除きすべて一体の地藏像であり、六体の地藏像の供養例は極めて異色である。

これを史料③の『吾妻鏡』の金色堂の記述では「六地藏」とするが、正確には平安初期以来の伝統的なスタイルを踏襲した「六体地藏」像と理解すべきものであろう。この「六地藏」とは、基本的に六体の印相と持物とがそれぞれ異なる地藏像を指すが(『今昔物語』巻一七・二三話、『覚禅鈔』巻七二・地藏下)、これが金色堂の場合、六体の地藏像すべてが左手には宝珠を持ち、右手は垂下して与願印を示しており、平安前期の貞観九年(八六七)頃の制作とされる奈良・中村区の地藏像の姿とまったく同一である。



中央壇の諸仏



諸仏の配置図

六体地藏像の事例 右述した通り、平安期の阿弥陀堂では六体地藏像は認められなかったが、実際、六体像は平安末期には幾つか実在した。

清衡が亡くなった翌大治四年（一一二九）七月七日、権勢を恣にした白河法皇は七七歳の生涯を閉じたが、この十月七日、月忌命日のため孫の鳥羽上皇が半丈六の弥勒像と「等身地藏六体」を供養した（『中右記』）。さらに同五年（一一三〇）五月七日、待賢門院（鳥羽皇后）も故白河法皇の月忌命日に当たり、「六体等身地藏」を供養（同）。久寿三年（一一五六）正月十一日には、前年十二月に亡くなった高陽院（鳥羽皇后）のため、臣下が等身阿弥陀仏一体と「三尺地藏菩薩六体」を供養（『兵範記』）。建礼門院（高倉天皇中宮）に仕



（金色堂・西北壇のうち一体。当初は中央壇のもの）

えた右京大夫は、壇ノ浦合戦（一一八五年）で戦死した恋人・平資盛のため彼の遺品に経を書き、併せて「地藏六体、墨書き」（『建礼門院右京大夫集』）したというから、平安末期における六体地藏像の造像例は何れも故人の追善供養であったことが判明する。

六体地藏像供養の意図 では、敢えて六体もの地藏像を供養した意図は何か。

例えば清衡と同時代に成立した『今昔物語集』の一説話によれば、年来、六地藏像を礼拝し恭敬した周防国の一の宮の宮司、玉祖たまそおのこれたか 惟高は命終の折に阿弥陀の宝号を唱えて心に地藏を念じ、阿弥陀あまたの西方に向かって失命したところ参河入道みかわりゅうどうじやう寂照しやうの夢に極楽往生の相が見え、人はみな疑いなき往生として貴んだという（巻一七・二三話）。これも同時代の天永二年（一一一一）頃に成立した『拾遺往生伝』にも、右の待賢門院の妹、藤原公子による臨終時での六地藏像供養に伴う阿弥陀浄土への往生信仰が窺え（巻下・九話）、さらに仁

平元年（一一五一）成立の『本朝新修往生伝』の沙門円能の説話（三九話）からも、六地藏と極楽往生信仰との結び付きが知られる。

そもそも六地藏には、死後に赴く六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）輪廻の悪世界からの救済が託されていた（前掲『覚禅鈔』）。再び『今昔物語集』によれば、地藏が単独でも地獄界に堕ちた亡者の救済のため地獄へと赴き、浄土へと導く姿が記述され（巻一七・二七話、三二話）、実際、中尊寺経の見返し絵の一つには、地獄界での地藏の救済の様子が描写される（『大般若経』第四〇）。つまり、六（体）地藏像の供養には、六道世界からの阿弥陀浄土への救済が託されていたのである。なるほど右掲した実際の六体地藏像の供養が故白河法皇や故高陽院、あるいは故平資盛の追善供養と結び付いたことは頷ける。

であれば金色堂での六体地藏像の供養も、必ずや故清衡の死者仏事と結び付いていたはずで、その安置供養は彼の極楽往生を祈念しての仏事であったことが新たに浮かび上がる。



西北壇・増長天像
(当初は中央壇のもの)



西北壇・持国天像
(当初は中央壇のもの)

二天像安置の時代背景 金色堂の持国・増長天の供養だが、時代的には極楽往生信仰と融合していた。

金色堂の建立から一八年後の永治二年（康治元

年・一一四二）、金鉢寺（滋賀県栗東市）の持国・増長の二天像は阿弥陀如来像とセットで供養されたもので、「往生極楽」と「現当二世（現世と来世）大願円満成就」が祈念されており（『平安遺文』金石文編二六四〜六号）、時代的な往生信仰との一体化が知られる。この阿弥陀像と二天像のセットは、金色堂の影響が指摘される十二世紀半ば頃の願成寺・白水阿弥陀堂（福島県いわき市）にも見られる。

おわりに

これまで金色堂は中尊寺のそれのみと見なされてきたが、実は十二世紀半ば頃の京中と、十一世紀後期の中国天台山にも「金色堂」が実在したことが新たに判明した。しかしながら安置仏を始めその実態は不明であり、何故に「金色堂」と呼称したのかも残念なことに未詳のままで、今後さらなる手掛かりを求めて探索を続けたい。

阿弥陀堂である金色堂に十一体もの仏像が祀られたことは特異であり、特に六体もの地藏像の安

置は他に類例を見ない。金色堂と同時代の史料から探ると、故人の追善仏事と六体地藏像の供養とが結び付いた事例が複数知られ、それは故人の極楽往生を六体の地藏像に託したことが新たに知られた。つまり金色堂の地藏群は、初代清衡の極楽往生を願うての供養であったことが判明する。

さらに持国・増長の二天像の供養についても時代的には極楽往生信仰と融合しており、まさに金色堂は、極楽浄土の阿弥陀信仰が隆盛を極めた時代を象徴する代表的なモノキュメントと言える。

この中尊寺金色堂の建立から九百年、折しも東京国立博物館本館では特別展「中尊寺金色堂」が開催中であり（一月二三日〜四月一四日）、小稿はその記念講演、「東アジアの仏教文化と中尊寺金色堂——仏像の構成と遺体の安置と黄金の仏殿——」の一部を、改めて再構成したものである。

かんの せい かん
岩手大学

数百年先に金色堂の姿を伝えるプロジェクト

国見 太郎

中尊寺金色堂が建立九百年を迎えられたこと、心よりお喜び申し上げます。平安時代に建立された皆金色のお堂を、現代の私たちが当時と同じ場所で行うことができます。まさに奇跡です。去年から、私たちは、その金色堂を後世に遺すプロジェクトに参加する貴重な機会を頂きました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

このプロジェクトのねらいは、金色堂の外観、堂内、壇上諸仏から装飾に至るまで、すべてをデジタルで記録しようというものです。デジタルアーカイブというと、文化財をデジタルカメラで撮影し、その画像を大切に保管しておく、という

イメージがありますが、この事業では、これまでにない新しい手法に取り組みました。8K技術やフォトグラメトリという最新のテクノロジーを使って金色堂の超高精細な3DCGを作ります。さらに、この3DCGは金色堂の形や色、質感を限界まで正確に反映し、金色堂をまるごと写し取るように情報を記録します。後述しますが、完成すればデータの保存のみならず、数百年先まで様々な活用できるデータになるのです。

NHKでは、これまでも中尊寺様と共に、金色堂をハイビジョンカメラなどで記録してきました。しかし、デジタルデータのかたちで網羅的にその姿を記録するのは、もちろん今回が初めてです。NHKでは一月に開幕した東京国立博物館での建立九〇〇年特別展「中尊寺金色堂」を主催しており、また、この展覧会に合わせBS8Kチャンネルなどで金色堂の特別番組を制作する計画があり、中尊寺様、東京国立博物館との共同事業として、一年がかりのプロジェクトを進めることに

なりました。

デジタルアーカイブのための撮影が始まったのは令和五年一月二十五日。この冬の平泉は雪が多く、積雪の中、スタッフ一同は金色堂に伺いました。NHK、東京国立博物館の研究員の皆さま、日通の専門チームなど、総勢三十人近いメンバーで、八日間（安全管理のため、中一日は休日）におよぶ撮影です。

毎日、拝観時間が終わる午後四時半から撮影が始まります。撮影は、大きく二つの工程に分かれます。まずは一眼レフカメラを使って金色堂の外観や堂内、壇上諸仏をあらゆる角度から撮影します。いわゆるテレビカメラは使いません。網羅的に記録するため、今回はすべての仏様を撮影用の専用の台にご移動いただき、三六〇度からぐるりと撮影します。こうすることで、ガラススクリーン越しでは見ることができない場所まで記録します。堂内も須弥壇の螺鈿の装飾や天蓋、巻柱の昔

薩像まで、すべてを丁寧に撮影しました。撮影した画像は一枚で六一〇〇万画素の解像度があり、最終的には金色堂全体で二万枚以上を撮影しました。

工程の二つ目は、3Dスキャナーという特殊な機器を使い、金色堂の形状のデータを記録します。文化財に影響のないレベルのレーザーを使って、ミリ単位まで正確に形状を計測するのです。こうして取得した一万枚以上の画像と、形状のデータを組み合わせ、限界まで正確な金色堂の3DCGを作ります。撮影した画像から立体のCGを作る技術はフォトグラメトリと呼ばれ、フォトリアルな3Dモデルを作ることができます。この技術は測量やゲームなどの分野で使われてきましたが、近年、文化財の記録事業にも活用が広がっています。私自身、CGというとコンピュータ上でデザインされた現実とは異なる制作物、というイメージを持っていましたが、フォトグラメトリは、実際に撮影した画像をもとに立体モデルを作るた



図1 一眼レフで壇上諸仏を撮影する様子

め、あくまで現実を捉えたものであり、文化財の記録事業と大変相性の良い技術だと感じています。

このフォトグラメトリは私たちの放送分野では、あまり使われていなかった技術のため、民間の専門会社（アフタイムレジ社）と連携して事業を進めました。いまテレビは2Dで情報を伝えています。将来、家庭でも3Dで映像が再生できるようにになれば、こうした民間の専門チームが持つノウハウが私たちの暮らしを大きく変えていくと感じています。NHKではBS8Kチャンネルでの放送を通じて、超高精細映像を送出するノウハウを培ってきましたので、その技術と組み合わせることで、今回制作する金色堂の3DCGを可能な限り高精細にすることを目標にしました。

そもそも、金色堂の網羅的なデジタルアーカイブ事業が実現した背景には、中尊寺の皆さまが金色堂を守り継ぐ中で感じて来られた思いがあります。金色堂は、文化財保護のため、ガラススクリー

ンで仕切られ、湿度や温度が管理されています。後世にこの美しい国宝を残すための対策ですが、このガラススクリーンがあるために、拝観者は堂内に近づく事はできません。しかし、ご存じの通り、金色堂は、その細部にこそ奥州藤原氏の歴史が凝縮しています。私は撮影前の下見の過程で金色堂の内陣に上げて頂きましたが、金色の諸仏と螺鈿蒔絵の装飾が圧倒的な密度で配された空間は、仏の力に包まれるような世界であり、まさに極楽浄土を思わせるものでした。

金色堂を詳細なデジタルデータで記録し、3DCGでその姿を正確に再現することができれば、誰もが仮想的に堂内に入ることが出来ます。そして、もっと直感的に奥州藤原氏の歴史や、その息づかいに触れることが出来ます。この事業は金色堂が本来持っている魅力や美しさをテクノロジの力を介して伝えようということで、中尊寺様、東京国立博物館、そしてNHKの共同事業として実現することになりました。

デジタルデータは単なる記録事業ではない

八日間におよぶ撮影ののち、3DCGが完成するまでに十か月以上を要しました。仏様の一像一像を個別のCGデータとして完成させ、並行して制作した金色堂のお堂の3DCGにデジタル上で安置するという壮大な事業です。出来上がったCGモデルのデータ量は一億ポリゴン以上という桁外れのボリュームとなり、果たして現代の我々のパソコンで処理できるのか、不安に思えたほどでした。

従来通り、テレビカメラを使って金色堂を撮影すれば、これほどの時間や労力がかかることはありません。しかし、なぜ今回、私たちがデジタルで記録する方法を選んだのか、そこに、どんなメリットがあるのか、事業のねらいを紹介させていただきます。

①【自由視点で金色堂を鑑賞することが可能になる】

私たち放送局がテレビカメラを使って文化財を

撮影する場合、必ずそこに番組のねらいが介在することになります。例えば、ある番組で、ご本尊の阿弥陀如来像の表情に注目するとします。撮影では、当然ながら阿弥陀様のお顔にズームインするカットを撮影します。しかし、放送後、今度は別の番組が、阿弥陀様の手の美しさに注目しようとした場合、以前の映像は使うことができません。映像には阿弥陀様の手のアップが映っていないからです。すると、私たちは再び、中尊寺様に相談し、金色堂にテレビカメラを持ち込むこととなります。つまり番組の制作者の視点が介在した映像には、番組のねらいが記録されるため、ほかの用途に使うことが難しいのです。テレビカメラで文化財を記録する手法の限界がここにあると感じています。

しかし、今回のように網羅的に全体を記録した3DCGを作ることができれば、状況は一変します。金色堂のCGはゲームエンジンと呼ばれるコンピュータゲーム用に開発されたソフトウェアで動くように設計されていて、ゲームコントロー



図2 3DCGで再現された金色堂

ラーを使って自由視点で鑑賞することができます。これを使えば、ある番組では巻柱の螺鈿の美しさに注目し、また別の番組では地藏菩薩像の文様に注目することができます。極端な話、このデータさえあれば、私たちは今後、中尊寺様に時間を割いて頂かなくても、デジタル空間で、いつでも金色堂を撮影することが可能になります。文化財を記録する時点では、私たち番組制作者のねらいを反映させず、網羅的に記録することで、制作者の視点が消滅し、汎用性の高い記録データを作ることができるのです。今後、技術がさらに進化すれば、この超高精度な3DCGデータをオンライン上で公開し、公共財として誰もが、いつでも自由に美しい国宝の魅力に触れることができるようになると思っています。



図3 3DCGで再現された金色堂

②【研究や教育への貢献】

今回、NHKでは、このデジタルデータを「デジタル金色堂」と名付け、特別番組で新たな試みに挑戦しました。「中尊寺金色堂 デジタルで解き明かす九〇〇年の謎」と題したこの特別番組では、スタジオに三二五インチ（幅七・二メートル、高さ四・〇五メートル）の大型の8Kディスプレイを設置し、そこにデジタル金色堂を映し、仮想的に金色堂内に入って、未知の魅力を探りました。原寸大で金色堂を表示することができるので、まるで実際に金色堂がそこにあるかのような体験ができます。

この特別番組では、工芸や建築、歴史など各分野の研究者の皆さんにスタジオにおいて頂きました。長年、金色堂の研究をされている方々ですが、ガラススクリーンの中に調査でも入った事が無い、という方もいらつしやう、「一生入れないと思っていたので、妄想とはいえ中に入って見られるのはすごく楽しみです」と仰っていました。自由視点で鑑賞ができるデジタルデータは、研究の

推進にも貢献することができます。番組では、デジタル金色堂を使って金色堂の美しさの秘密を探りました。須弥壇の孔雀の装飾、屋根の木瓦葺（こがわらぶき）、巻柱の螺鈿などは、ガラススクリーンのごしに特徴を捉えることは簡単ではありません。ところがデジタル金色堂で接近してみると、その技術の高さに圧倒されます。例えば孔雀の羽毛は数百回以上の蹴彫りを重ねて表現されており、その目は仏様のように穏やかで美しく刻まれています。屋根は文化財保護の観点から照明が抑えられているために、実物では分かりにくいですが、実は焼き物の瓦ではなく、木で作られています。デジタル金色堂で近づいてみると木目もはっきりと分かりました。なぜ金色堂の屋根は焼き物の瓦ではなく、木で作られているのでしょうか。研究によると、焼き物の瓦で屋根を作ると、軒が美しく広がる金色堂の屋根は重くなり、形が崩れてしまう可能性があるため、職人たちが屋根を軽量化しようと考案した大変高度な技術だと考えられるそうです。また堂内を飾る螺鈿には、当時、

日本ではとれなかった夜光貝が使われており、須弥壇の高欄には象牙や紫檀もあしらわれています。デジタル金色堂でそのディテイルを見ると、奥州藤原氏が当時、いかに豊かな財力を誇り、海外とつながっていたかを実感することができます。

このデジタルデータは、教育分野にも貢献できる可能性を秘めています。NHKでは文化財の3DCGを活用し、全国の大学と新しい授業の開発に取り組んでいます。宮城や東京、大阪にある四つの大学の教室に4K解像度のモニターを設置し、そこに文化財の3DCGを表示します。そして、ひとつの大学でコントローラーを使って、この3DCGを動かすと、ほかの三つの大学の画面に表示されたCGが同期して動きます。授業では、この仕組みを使い、四つの大学の教授が順番にコントローラーを操作し、それぞれの視点で国宝の魅力をレクチャーしました。リモートでつながる授業なのですが、まるで、全員でひとつの文化財を囲んで調査しているような未来型授業で、学生

の皆さんからも好評を頂いています。文化財をデジタルデータで記録したからこそ、距離を超えて学生たちがつながり、新しい授業を作ることができるのです。もし機会が頂ければ、今回、金色堂の特別番組に出演を下された全国の研究者の教室をつないで、リモート授業を開催してみたいと思います。

③【新しい鑑賞体験の提案】

中尊寺様の建立九百年の事業の柱のひとつが東京国立博物館での「建立九〇〇年 特別展 中尊寺金色堂」です。NHKも主催として参加させて頂いています。この特別展では、金色堂の3DCGをフル活用し、会場において頂いた皆さまに新しい鑑賞体験を提供することに挑戦しました。会場に特別番組でも使用した三二五インチの大型8KLEDディスプレイを設置し、そこに金色堂を原寸大で表現することで、いわば上野に金色堂がやってくる、という迫力の空間を設けようというねらいです。

当然ながら、実物の金色堂は動かすことができません。しかし、超高精細な3DCGを活用すれば、平泉以外の場所でも、仮想的に金色堂の原寸大の美しさを体験して頂くことができます。そしてガラススクリーンの中に入ったかのような特別な視点で堂内の美しさを間近で感じて頂くことも可能になります。今回、会場に設置した8Kディスプレイは、画像を構成する単位である画素の間隔が0・9ミリという製品で、画素密度の高さが業界屈指のものが選ばれました。大画面でありながら、まるで実物を鑑賞するように、画面に近づいて鑑賞することもできるため、来場者が主体的に金色堂の美しさを見つけることができます。

展示会場では、このディスプレイがエントランスの先に配置されています。来場いただいた皆さまには、まず金色堂の原寸大のスケールと美しさを感じて頂いた上で、お出ましになった実物の壇上諸仏などを鑑賞いただく順路になっています。金色堂九百年の伝統とテクノロジーを組み合わせた新しい展示会です。文化財を保護しながら、文



図4 会場イメージ

©NHK

化財の魅力伝えるこうしたチャレンジが、誰もが知る金色堂の知られざる魅力に出会うきっかけになれば、と期待しています。

金色堂が私たちに問いかけているもの

今回、この事業に関わらせて頂く中で、奥州藤原氏が平安時代に築いていた独自の文化と豊かさを学び、その平和主義的な思想に、心打たれました。当時、平泉にあった暮らしがどんなものだったのか、かつての平泉に身を置いて感じてみたいと思いました。もし奥州藤原氏がさらに長く続いていたら、日本の中世はもう少し変わった姿になっていたのではないか、と考えるようになりました。もしかすると武力が表に出ない、別の価値観がもっと早くから日本に広がっていたかも知れません。金色堂が今も私たちの心を動かすのは、そうした思想を体現した空間であるからであり、ひいては世界で戦争が続いている現代人への問いかけでもあると思います。建立九百年の節目に生まれた金色堂の3DCGが、奥州藤原氏の時代に想像を広げ、

東北に花開いた輝かしい文化を知る一助となることを願っています。

くにみたらう

NHKメディア総局 統括プロデューサー

天の邪鬼—— グラビアの説明を兼ねて

佐々木 邦世

仏法守護神、天部の像の足下に踏みつけられていた邪鬼の彫像です。が、毘沙門天（多聞天）やら持国天やら、その主体の像は消失して、漆箔もすっかり剥げ失せた姿で一對遺されていました。

昭和三十年の五月に（旧）讃衡蔵が竣工するまでは、中尊寺に遺る仏像や天蓋、荘嚴の片々などは白い土蔵の宝物庫に収蔵陳列されておりました。拝観者が入って直ぐ目につく所に、この天の邪鬼が横になっていたのです。

ある日、寺の人が誰かを宝物庫に案内して行きます。ご来客は、帽子を被ってもんべに靴の、ちよつと変わった風姿でした。案内が先に立ち、進んで秘仏一字金輪仏を開扉して、と、振り向いても、その方は入り口直ぐの所で立ち尽くしたまゝ、何か呟いているようでした。

……八百年も、踏みつけられたその格好でか。なあ、

辛かったべした。本当に、申しわけねエス……。溜め息をついて、まだ暫くそのままでした。

あの方にとつて、天の邪鬼は何だったのでしょうか。世間にわざと逆らうような、ひねくれた性格の表象とは違ふ、むしろごちない、弱さも我慢強さも含んだ、人柄というか人間性を面容に見ていたのかも知れません。

むしろ現代に、人道を外れた、消耗戦を止められない執拗、頑固な「顔」があります。昔も今も、彼方でも此方でも、人が人を殺す愚かさが止まない人間界ですが、「大事なのは一人ひとり。普通の人がどう考えるかが一番大事。僕はそう思う」と、「天声人語」で小澤征爾さんが残してくれた言葉を読みました。

そうそう、天の邪鬼の前で立ち尽くしたあの方、後で板画の棟方志功さんと聞きました。私が中学生になったころの思い出です。

（本誌編集者）

第六十二回平泉芭蕉祭全国俳句大会 特別講演

震災から考える

「俳句旅枕―みちの奥へ」

講師 渡辺 誠一郎 先生

こんにちは。渡辺誠一郎と申します。

「小熊座」という結社に入っています。創刊主宰が佐藤鬼房という、まさに岩手出身の俳人で、塩竈に長年住んだ方に師事しました。現在「小熊座」は高野ムツオが主宰です。私は、つい最近まで編集長を務めていたんですけども、そろそろ卒業しても良いかなと思ひまして、今は単なる同人です。

今日はどういう場にお話をといて、非常に恐縮しております。うまくお話し出来るかどうか

心配ですけども、よろしくお願ひします。

平泉という町は、個人的には非常に好きな所で、みちのくの歴史にとつては非常に重要な地ということもありますし、歴史の記憶が集まっている史都ということもあるので、結構平泉には来ている方だと思ひます。

以前、中尊寺白山社の野外能舞台で薪能が演じられた時も、私は鈍行の電車に乗ってやって来て、感銘を受けたことがあります。

私は現在宮城県の塩竈に住んでいるんですけども、平泉へは鈍行を乗り継いで来るのがすごく好きで、学生時代もそうして来たイメージが非常に強く、今回も鈍行を乗り継いで、ゆっくりと平泉の地に来ました。そうすると、平泉の地に自然に受け入れていただくような感じがして、すごく好きなんです。

平泉へ電車で訪れる際に、東の方に東稲山が見えると、いつも思いが湧き上がってきます。西行



講演の様子

のこと、芭蕉のこと、いろいろ思い出されます。そして何より義経です。私も義経信奉者の一人なので、義経が東稲山を見てこの辺で過ごしたのかなと思ったり、達谷窟に行ったときなどは、義経は馬を走らせて来たのかななどといつも思い浮かべ感慨を深くします。

ですから、この地に来るとあれこれ頭の中に妄想が立ち上がったたり、非常に切ない気持ちも含めて、この地が好きなことが改めて認識させられる、そんな思いがします。

『俳句旅枕』という本を何年前かに書いたんですけども、この中で平泉についても触れています。

東北六県、青森から各地を巡って私なりのみちのく論を書いたんですけども、中尊寺の中で好きなのは、金色堂も好いんですが、かつての覆堂、鞆堂たもとですね。

先ほど調べてみたら一二八八年に造立されているんで、鎌倉時代ですから芭蕉が来た時は四百年くらい経っていた。それから昭和まで、金色堂を

護ってきたわけです。芭蕉はこの覆堂に入って、金色堂をどういう気持ちで眺めたのかなと、いつも想像が膨らみます。

現在は、「清衡公八百年」を記念した卒塔婆が堂内に建っています。青森ヒバの角材を削って造った、非常に高くて太くて神々しい感じがします。何よりそこに入ったら、その空気感と松葉ヒバの香りですごく不思議な感じがしました。

今の金色堂、申し訳ないんですけども、ガラス越しですのでね、何かプラモデルのような……そういう感じが……しないでもありません。

それに比べて、鞆堂の中の空気感といえますか、昔の香りと言いますかね、特別な空気が漂っている感じがします。是非、皆さんも一度、そこに足を運んだらいいんじゃないでしょうか。案外鞆堂を見ている方が少ないような気がします。

今日のお話は、「俳句旅枕」についてということですけども、お配りした資料には『俳句旅枕

—みちの奥へ—の視座」と「視座」という言葉を使わせていただきました。これは、角川の俳句雑誌に二〇一七年二月から一九年一月まで連載したのを一冊にまとめたものです。

当時編集の方からですね、俳枕について全国巡って文章書いてくれと言われたんですけども、私それほど俳枕に詳しくないし、時間も無かった。ふと、「俳句旅枕」という言葉が閃ひらめいたんですね。書き始めた動機は、二〇一一年に東日本大震災がありました。それがそれを踏まえてもう一度みちのくと言いますか、私たちの住んでいる東北の地を、自分なりにもつと整理しないと、どうも落ち着かないという気持ちになっていました。

私が住む塩竈市は東日本大震災の被災地です。塩竈市内だけで四十四人ほど津波で亡くなりました。塩竈は地形的には、島みたいに小高い岬がせり出してるんですけども、それ以外は市の殆んどが低地です。海を埋め立てて市街地を造ったんですね。

多賀城の国府の港が塩竈です。今、多賀城に行くくと礎石とか少し面影が残っています。しかし塩竈は違います。古代の奈良平安の頃から埋め立てて集落ができたんです。塩竈神社は小高い山で、その下に町並みがあるなど、基本的に古代の地勢は今も変わらないんです。芭蕉が塩竈にやってきた時に見たような、丘の、空の線が全然変わってなくて、想像力が膨らんでくる、そういう塩竈の街です。

被災当時、私は塩竈市役所の職員でして、退職の年でした。丁度、最後の会議をやったら地震が来て、その後街は、皆さんが映像で見ているような惨状が広がっていました。

そこから私は復旧の仕事に携わりました。いろんな食料を調達したり。現場というよりも事務処理をするような立場なんですけども。塩竈には島もあって、松島に浮かぶ大きな島ってほとんど塩竈なんです。四つの島に五つの集落があって、そこはほとんど壊滅状態だったんです。その島で亡

くなったのは三人だったんです。それも、いったん避難所に逃げて、それからちよつと薬を忘れて戻った人が二人亡くなった。

あと一人はどうして亡くなったのか分かんないんですけども、亡くなった一人が私の非常に親しい友達だったんです。その旦那さんは捜索が終わっても一人残って、「もう一度俺探してみる」って。そうしたら瓦礫の所に真っ赤な長靴を発見した。自分が買ってあげた長靴なんで、すぐ分かったんだってという悲しい話を聞きました。

そういう惨状を目の当たりにしながら、震災のことを考えざるを得なかったというのが、現実です。

その中で、俳句って一体何なのかとか、そういう惨状の中で詠む自分って一体何なのかっていうのを考えざるを得なかった。

海だった所、こういう言い方は、悪い言い方なんですけども、海の立場からすると、津波はかつて海が在った所に戻ってきたのです。海だった所

には海が戻ってくる、海の怖さって、そういうことだと思っんですね。

そうした体験をしながら、もう一度俳句について考えざるを得なかった。その時に「小熊座」に書いた文章を読んでみます。

「当時の自分自身のことを思い出しても、容易に俳句の世界に震災を持ち込むことはできなかった。路上に車が散乱し、破壊された家屋などの瓦礫が一面拡がり、異臭が漂う震災の場にあつては、(中略) なかなか言葉にならない。身体以上に精神に亀裂が走り、今なお浮遊している感覚です。

千年に一度と言われる震災の大惨事に、万単位の半減期の放射性物質を放出した原子力発電所の事故が覆い重なった現実には、向き合うべき言葉の力に及ばない事を痛烈に感じました。

大震災や原発事故と同じ時空にいるという現実。我々の言葉の延長に科学の言葉があり、原発を創り上げた同じ言葉の世界にいる違和感を

捨て去る事が出来ない。」

というふうな、これ翌年くらいに書いた文章です。

多賀城に「壺碑^{つぼのいし}」があります。芭蕉がそれを見て感動した。学術的には「壺碑」っていうよりも「多賀城碑」という言い方をするんです。そこで芭蕉が、山野崩れて跡形もないけども言葉だけは残ったことに感涙に咽^{なみだ}んだというんですね。それを、Donald・キーンが、高く称賛しています。

でも私に言わせれば、あの震災を経たしまつてからは、それも通用しないと思うんです。つまり、原発から出る、放射性物質の最大半減期っていうのは十万年後っていうんです。つまり十万年後まで残る放射性物質を作ってしまった、飛散させてしまった人間の前で、言葉がそこまで追いつくだろうかということなんです。十万年っていうのは、縄文時代でも今から二万年ぐらいい前ですかね。言葉が残ってないんですよ、記録が。さらにこの先の十万年後に、今我々が話している言葉が通用するだろうか、となりますね。

放射線廃棄物の処理については、地下三百メートルに埋めるなど世界的に色々やっていますけども。十万年後先の人間に「これ、危険な物を埋めましたよ」ということをどう表すか。日本語でなくて、英語で通用するか、絵で通用するか。つまり言葉がそういうものを前にすると、通用しなくなってしまうたということですね。新たに言葉というものを捉え直す必要があるのではないかということをお願いいたします。

さて、資料に私の俳句を載せましたが、これに沿って震災時の私の思いを語らせていただきます。

みちのくの春日の瘦せて鹹しおかし

慟哭の一幹として裸木は

盗汗かくメルトダウンの地続きに

生きるとは帰らざること秋の風

盗汗かくメルトダウンの地続きに

盗汗かくそして、メルトダウンと詠みましたが、私は原発について、実は個人的に勉強した時期があつて、あの時はもう大変だなあと思いました。当時、疲れて盗汗をかきながら復旧の仕事で夜は事務所のソファで寝ていたんで、その時に地続きにメルトダウンを体感するという、そういう不思議な恐怖感で一句が出来たんです。

生きるとは帰らざること秋の風

「生きるとは」って、津波っていうのは戻ってはダメだ、戻ったら死が待ってるっていうことです。戻って死んだ方がいいと思います。

津波とは海還ること力草

先ほど言った、津波っていうのは海があつた所にだいたい来るように、津波とは海還ること、非常に非情な言い方ですけどね、力草とこんな句も作ってみました。

(力草 鷹が鳥を捕えたとき、引きずられないように片足でつかむ草)

祈りとは白き日傘をたたむこと

震災における俳句って、個人的に言うところ、祈りしかない。鎮魂と言いますか、そういう思いで詠んだ一句です。

これは、石巻に行つた時に、日和山の頂上に多くの人が花束を次々に置いてつたんです。そこに日傘をさした女性が来て、日傘を折りたたんでお祈りしていた。そこを象徴的な意味としてそのまま俳句にしました。

友の死をゆさぶるごとく海胆うにすすする

生き残った者は死者に対しては、何も出来ない。海胆をすすつてくるぐらいしか。

閑上の芽吹かぬ木々と芽吹く木と

宮城県名取市、閑上ゆりあしは、こども被災した港。砂浜もある町です。しかし復興は着実に進みました。

猪の飢え地の飢え天の飢え

震災後の世界は、生き物、地上そして天。神が居るや否やというところまで、想像を豊かにせざるを得ない。そんな思いです。

ところで、震災体験を踏まえて取り組んだことは、「おくの細道」を含め古典をもう一度勉強しようということなんです。

市内の人に呼び掛けたら、四、五十人集まってくれて、公民館で「おくの細道」のいわゆる読書会をはじめました。

震災後から、「おくの細道」や「野ざらし紀行」芭蕉の紀行文を読んで。その後、正岡子規の「はて知らずの紀」をはじめ紀行文を全部読んで、今もまだ続いているんです。参加者は今は十七人くらいになりましたけども。河東かわひがし碧梧桐あきとらの「三千里」今読んでるんです。紀行文が好きだし、実際歩いた光景で、そこに俳句も詠まれている。楽しみながら。何か、共有したいという思いがあつたんです。

そして、今回の「俳句旅枕」の旅に出て、あらためてみちのくを考えました。「道の奥」っていうのは、いわゆる雅なる京からの論理なんですね。都人から見るとの道の奥っていう論理です。これは「伊勢物語」とか色々古典読むと京が中心と良くわかります。中華思想が基本ですからね。みちのくは異界の国、そう見られていた。

京都の文化から言うと、みちのく世界は人間世界と違っていなかった。現実そう思っていたかどうかは別として、当時の都人、中世のそういう世界によりかかって芭蕉の世界もあるんですね。

芭蕉は非常に偉大な俳諧師だと思いますけど、やっぱりそういう論理の中に芭蕉はいるわけです。しかし、そういう論理にはちよつと違和感を感じます。

ですから、東北学という言葉、赤坂憲雄さんという方を中心に山形の芸術工科大学で、東北学を提唱して、学問として東北をもう一度考えようとする。

はじめて、今も続いています。それはどういうことかというところ、都から「みちのく」を見ているのは南からの論理です。それを北から、逆に論理を取り返さないと、本当のみちのくが見えてこない。都の論理と違う、みちのくの論理がどう構築出来るのか、というところが大事なんです。

我々みちのく、東北人っていうのは、東北の方から、芭蕉なり曾良の視点をもう一度きちんと受け止めて、捉え返して、折り返して見る視点が必要だと常に思うんです。

「旅枕」で気になったみちのくの俳人に少しだけふれます。

盛岡に縁のある俳人として山口青郵です。「みちのくはわがふるさとよ帰る雁」とか、みちのくをいろいろ詠んでいます。

青郵はてらいなく、「みちのく」っていうっぱい作ってるんです。「みちのくの淋代の浜若布寄す」。あの青郵のみちのくへの屈折感のなさが気になり

ます。

一方、佐藤鬼房は「みちのく」って言葉あんまり使わないんです。でも鬼房の存在そのものが、なんかみちのくって感じする。隠し立てのないみちのくでしょう。

続いて、棟方志功。実は昨日青森市に行ってきたんです。私は六年間津軽で過ごしたんです。津軽人の空気も、気になるところです。棟方志功も俳句を書いている。「渦置いて沈む鯨や大月夜」とかね。石田波郷の俳句を版画にしたりしてあるので、図書館に行くとき志功版画全集ってあるので、それ見てもらうとすぐく面白いです。前田普羅という俳人に師事したんですね。疎開していた富山に居たとき俳句習いました。

宮沢賢治は、詩の一編を五七五に直したりしてるんです。「おもむろに屠者は呪したり雪の風」、詩の一節をちよつと改変してるんです。賢治は俳句向きでなかったかも知れない。

さて、釜石といえば、照井翠さんの句「三・

一一死者に添ひ伏す泥天使」が特に印象的です。

釜石は鉄の町です。あそこは、東北の上海と言われたんです。つまり鉄を作り始めた、よそから技術者とか労働者が集まってきた。実は、東北の上海ってもう一カ所あったんです。塩竈です。東北で初めて鉄道が走った町って塩竈なんです。近代的に港と鉄道があったから、塩竈にはすごい人間が集まってきた。今は漁獲低調なので元氣なくなっただけですけども。美食の町とも言われ、寿司が美味しいんです。

釜石は東日本大震災で大変な被災をしましたが、でも、東日本が初めてではもちろんない。明治二十九年、明治三陸大津波。人口の半数が亡くなったと言われているんです。

この時、東京で雑誌「文芸倶楽部」が創刊され、震災を描いた錦絵が載り、これを見て正岡子規が俳句作ってるんです。「皐月寒し生き残りたるも涙にて」。この時に、森鷗外とかも、この文芸雑

誌に寄せて、三陸大津波についての文章を書いて
いるんです。

子規の「生き残る骨身に夏の粥寒し」、なんか
本当に粥食つてみたいでしょ。写真を提唱した
子規の想像の一句です。

昭和八年には昭和三陸大津波。死者百六十八人、
市街地は壊滅して、死者行方不明者二千五百人。
この時、津軽三味線奏者の高橋竹山も被災してる。

昭和二十年には釜石市が津波ではなく艦砲射撃
にあつて。日本初の艦砲射撃で、死者七百七十三
名。この時、工藤俳痴つて人がいました。明治三
陸大津波の時、医者がいないのでやってきた人が、
啄木の母親の兄なんですけど、「焼け残る俳句蒐
めて青嵐」と詠んでいます。

これは艦砲射撃で焼けてしまった一句です。

この様に東日本だけじゃなくて、三陸沿岸は、
数限りない被災、自然災害があつて、その上に今

の釜石がある。そこまで遡つてもう一度、被災災
害を考える、歴史を考える、みちのくを考える。
そういう作業をしないと、本当の釜石のこととか
東北のことが分かんないと思います。

福島県須賀川。芭蕉が「風流の初めや奥の田植
系歌」と詠んだ所ですね。

ところが、永瀬十悟が被災地須賀川を「風流の
はじめの地なり田植えせむ」と詠みました。

風流の初めの地に放射能が降り注いだけれど
も、田植して次に行くぞ、負けないぞみたいな思
いがこもってますよね。この様に被災後を踏まえ
てもう一度芭蕉の風流の地を自分なりに整理して
いくことが大切だと思います。

もう一つ大事なのは、明治二十六年、子規が「は
て知らずの期」に須賀川を訪れた時に、これは新
しい俳句を提唱しに来ただけども、地元の俳諧
師に「まあ、そんな事言わないで」って軽くあし
らわれてしまった。つまり私に言わせると、俳句

革新の挫折の地でもあるんですね。

風流の地が、放射能なり、子規が挫折した地で
もある。そう複合的に捉えないと、須賀川の本当
の面白さっていうのは分からない。

そして、須賀川に円谷幸吉が居ました。オリン
ピックに出て亡くなったあの人の哀しい遺書に
は、「父上様、母上様、三日とろる美味しゅうご
ざいました。干し柿、モチも美味しゅうございま
した。敏雄兄、姉上様、おすし美味しゅうござい
ました。」とある。この言葉を前にすると、須賀
川の芭蕉の見た風流の地もね、風流だけでは済ま
せなくなる。この新しい言葉が、その地に生まれ
た、そういうところも含めて須賀川をもう一度考
えなくてはと思うんです。

この様に東北各地を回りますと、現在に繋がる
豊かなストーリーが色々読み取ることが出来ま
す。既成のみちのくとは異なる豊かな新しいみち
のくを、我々自身が言葉として紡いでいく必要が



——これから選評の6名選者——

ある、俳句も含めてですね。こちらからの東北の論理を、新たに組み立てていく必要があるのではないか、という感じがする訳です。

私の、みちのくに対する思いと、俳句に対する姿勢、理解していただければありがたいです。

プロフィール

わたなべ せいいちろう

昭和25年 塩竈市生。

句集『地祇』『赫赫』など

紀行集『俳句旅枕 みちの奥へ』

・礎石から光芒の立ち花あやめ

骨寺村莊園遺跡

ほねでらむらしやうえん

～中世の農村景観を未来へ～

西 幸子

世界は目に見えるものだけで出来ているわけはありません。目に見えないもの……それは空気であったり、空想上の生き物であったり（もしかして見える人もいるかもしれないが）、神様や仏様であったり…。

そういった目に見えない大切なものが、ここ岩手県一関市巖美町本寺地区の骨寺村莊園遺跡には、さまざま存在しているのではないか、という思いを私は抱いております。

一関インターチェンジを出て、国道三四二号線

を栗駒山方面に車で一五分ほど走らせると骨寺村莊園遺跡にたどりつきます。

ここは昔、中世の時代に「骨寺村」と呼ばれる中尊寺経蔵の莊園でした。当時描かれた絵図の農村景観が今なお良好に保たれている全国でも稀有な遺跡です。

ちなみに、中世の村の姿を今でも視覚的に体感できるのは、大分県豊後高田市の「田染莊」と一関市の「骨寺村莊園遺跡」と云われており、絵図研究家の間では「西の田染、東の骨寺」と並び称されているとのこと。

かつて平泉野（台地）にあったとされる骨寺堂の存在と、天台宗の高僧の髑髏が逆柴山に埋められたという伝説から「骨寺村」と呼ばれるようになったということです。

後者の髑髏伝説に関しては、鎌倉時代の仏教説話集『撰集抄』に記されています。西行法師自らの経験を語った本と伝えられていますが、西行に仮託した誰かが鎌倉時代後半に作成したというのが実のところのようです。

「骨寺村」という印象的な名は、江戸時代の初めに「本寺」に転化したと伝えられています。それでは何故、骨寺村が中尊寺の荘園となつたのでしょうか？

今から約九五〇年前の平安時代中頃、奥州では前九年合戦と後三年合戦という大きな戦がありました。この二つの戦いに巻き込まれ悲惨な様子を見てきた藤原清衡は、一一世紀末に江刺から平泉に館を移し、浄土思想に基づいた平安な都市の造営を始めました。そして度重なる戦により命を落とした敵味方全ての人々の霊を慰め、弔うために中尊寺の建立を始めたのです。約一〇〇年にわたる黄金文化、平泉の歴史はここから始まります。

その清衡は、自らの発願により、八年もの歳月をかけ五三〇〇巻から成る「紺紙金銀字交書一切経」を完成させた自在房蓮光を、その経を納める中尊寺経蔵の初代別当に任命しました。蓮光は私領であった骨寺村を経蔵に寄進。年貢や公事物を納めて経蔵を維持する「荘園」として、あらためて骨寺村を清衡から認められました。これが中尊

寺経蔵別当領骨寺村の始まりで、一五世紀の室町時代まで相伝されていきます。

蓮光が完成させたその経巻は、紺紙に銀の界線を引き、にかわで溶いた金と銀を用いて一行ごとに交書さ

れた荘厳な装飾経です。経の奥書により、奥州市江刺の益沢院でその一部が写経されたことが分かっています。完成には莫大な財力が必要とされ、当時の藤原氏の経済力と平泉文化の水準の高さが偲ばれます。現在確認されているものほとんどが国宝が重要文化財に指定されています。



奥州市江刺「益沢院跡」

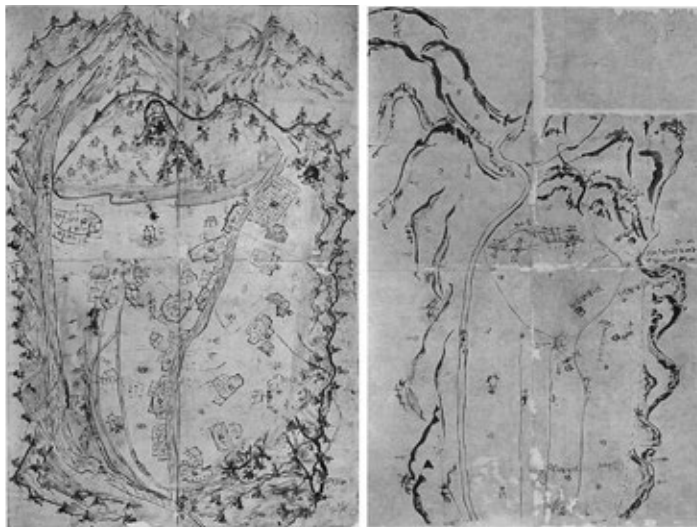
文治五年（一一八九）に奥州藤原氏が滅んだ後も骨寺村は、当時の別当職にあった心蓮の嘆願により、鎌倉の源頼朝から、東は銚懸・西は山王窟・南は磐井川・北はミタケ堂馬坂の範囲を寺領として安堵されました。

鎌倉幕府公式の記録『吾妻鏡』の「文治五年九月一〇日」の項に、奥州合戦直後に経蔵別当の嘆願により、骨寺村は引き続き経蔵別当領として安堵され、四至（東西南北の境界）が確認されたという内容の記述があります。

この四方を境に、西を正面に描いた二幅の荘園絵図『陸奥国骨寺村絵図』が中尊寺の大長寿院に伝わっています。鎌倉時代末期に描かれ、国の重要文化財に指定されています。

二幅のうち、先に描かれたとされる「仏神絵図（簡略絵図）」は、地理的景観がよく把握されており、村にある神社などの経営費用を賄う仏神田の記述があります。一方、在家や水田の形が詳しく描かれてあるものが、「在家絵図（詳細絵図）」です。

陸奥国骨寺村絵図



在家絵図（詳細絵図）

仏神絵図（簡略絵図）

絵図は、当時藤原氏に代わって頼朝から支配を任された郡地頭・葛西氏が、度々荘園に対し自領であるかのような働きをしたため境相論が起り、その際に使用されました。

なお、中尊寺領であつた骨寺村は天台宗の村であり、浄土思想の存在が考えられます。この村にとっての西方浄土とは、絵図の頂点に描かれ、現在も春と秋の彼岸の中日には山頂に夕陽が沈む、駒形（栗駒山）の方角です。

これはつまり平泉・仏国土（浄土）の農村部への拡がりを示した絵図でもある故、西境の山王よりもさらに西まで、頂点に描いたと推察されます。境相論だけを表示しているわけではないと理解されます。

いずれにせよ、絵図には中世の農村の風景や生業、神仏への信仰など多くの情報を書き込まれ、人々の暮らしに根ざした豊かな精神世界を感じ取ることができるのです。

現在もこの静かな山里には、絵図に描かれた社や小さな祠がまつられ、「いぐね」（居久根）に囲まれた屋敷が点在し、また明治に作成された地籍図により、一部の小区画水田や用水路、田越しの灌漑など、昔ながらの土地利用の形が維持されていることを確認できます。

骨寺村荘園遺跡は平成一七年に国指定史跡に、さらにこの伝統的な農村景観を貴重な文化財として未来へ伝えるため、翌一八年に全国で二番目の重要文化的景観に選定されました。

国土の開発により、長閑な日本の原風景が日本各地から消えゆく今、歴史的価値ばかりではなく、農村景観としての価値と魅力が高く評価されて、「一関本寺の農村景観」は、重要文化的景観に選定されたのです。

ちなみに、重要文化的景観の選定制度は、平成一六年の文化財保護法の一部改正によって始まり『地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で、我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないも

の』と、文化財保護法第二条に記載されています。令和五年時点で、全国で七二件が選定されています。

平成一六年に発足した地域住民全戸加入の「本寺地区地域づくり推進協議会」はこの文化財の指定選定をきっかけに、基盤整備から歴史を生かした地域づくりに大きく方向転換することとなりました。しかし、米価の下落や住民の高齢化など、農業を取り巻く環境が年々厳しさを増す中、効率化の図れない本寺地区の小区画水田や土水路は、地元にとって大きな不安の種であることに変わりありません。

「営農の維持と景観保全」……現代において相矛盾するこの二つを両立させるといふ難題に立ち向かうため、本寺地区では官民一体となった様々な取り組みが行なわれています。五年に及ぶ全国初の景観保全農地整備事業や、市内の建設業・水道工事業の従業員の方たちの協力のもとに行なわれる用水路の一斉泥上げ作業などです。

さらに、減農薬・自然乾燥で作られた荘園米の



米納め

オーナーさんへの提供や、ブルーベリーや南部一郎かぼちゃなどの特産品の普及、春のお田植えや秋の稲刈り体験交流会、年末の米納めなど、中尊寺との絆を深め地域の情報を発信するイベントも恒例行事として開催されています。

平成二三年には、骨寺村ガイドダンス運営協議会が設立され、産直・レストラン・研修室を備えた骨寺村荘園交流館（若神子亭）の管理棟が完成しました。さらに翌々年には、骨寺村荘園遺跡の歴史や価値、本寺地区の文化や魅力を、展示や映像により分かりやすく解説する展示棟も併設されて、今では年間二十万人以上が訪れる重要な交流施設となっております。

中世に描かれた絵図の当時の農村景観が、緩やかに変化しながらも、今日まで極めて良好に継承されてきた本寺の農村景観。大方の農村は効率化を求め、大きな区画で矩形の水田にとって代わり、近代化の代償として伝統的な農村風景を失っていききました。

自然災害や地球温暖化など、昨年の猛暑で誰もが地球環境の悪化を実感したはずです。人災と思える自然災害も少なくありません。



骨寺村荘園遺跡

そんな今こそ、自然は我々生き物たちにとって敵にも味方にもなり、祖先たちはそういった自然を相手に闘い、ときには妥協しながら自分たちの暮らしを築き上げてきたという認識を新たにすべきでしょう。自然に逆らい、多くの人間が便利さを追求し続けたらこの先どうなるかと。

「目に見えない大切なものを探しに来てください」

村一面に広がる栗林、山の稜線を駆け巡る修験者の姿、鎮守のお祭り、稲穂を渡る風。土水路のほとりまでひっそり命を繋ぐ生き物たち……。古より村人たちは、日々の辛い農作業も栗駒山に沈む美しい夕陽を眺め、慰められたことでしょう。

骨寺村荘園遺跡は一見、価値が分かりにくい所かもしれませんが。しかしここには、人々の日々の営みと祈りによって九〇〇年にわたり受け継がれた、目に見えない大切なものが満ちているのです。



骨寺村荘園 中尊寺米納め 参加の皆さん（12月17日）

エフエム岩手平泉支局 千葉芳邦氏より提供

北上山地ぶらり旅の風致ふうち

小野寺 隆 三

昨年十二月に『伊達・南部藩境を行く』を書き上げ冊子にしたが、五冊目ともなると「暇だね〜」と笑われたり、「北上山地ってそんなに楽しい?」と問われたりする。確かに、好き勝手なことばかり書いて「見て! 読んで!」は迷惑かもしれないので、これを機会に「ぶらり旅」をするきっかけを多少紹介させていただきます。

平成二十八年まで遡るが、その年、岩手県ライオンズクラブの月刊広報誌を川嶋印刷で担当することになり、編集長となった菊地慶矩社長から特集頁の企画を一任され、とりあえず岩手県域の広報誌なので、少なくとも一関〜盛岡に至る共通のテーマが良いのではと考え「北上川」をキーワードにして模索したわけです。結果、古碑や史跡を巡るなら北上川東側と確信し、たどり着いたのが



源義経公の愛馬太夫黒の碑に沿って流れる弓手川（「気仙沼街道を行く」より）



奥州藤原氏一族の墳墓が佇む五位塚墳丘（「あづま海道を行く」より）

県道一四号線の「あづま海道」で、一年間ワクワクドキドキしながら巡り歩きました。

その様な中、平泉関連として印象に残っているのは奥州市前沢生母せいぼの月山神社です。平泉の方ならどなたもご存じだと思いますが、四代泰衡公がお亡くなりになった際、泰衡公夫人が悲劇の死を弔うために山伏に命じて月山神社を建立したと伝えられ、現在も地元の方々に守護されています。さらに北に進めば藤原経清公の「五位塚」あり、藤原清衡公の「豊田館」、紺紙金銀字交書一切経を写経した「益澤院」など、平泉のルーツに辿りつきます。

そうした背景のなかで、東稻山麓が日本農業遺産に認定されたりして、益々北上川東側の山系に愛着が湧き、それなら山沿いに三陸海岸まで進めば、知らなかった神社仏閣、史跡など参拝出来るのではと思います、ぶらり旅を始めました。

まず、一関のカツバ崖から「気仙沼街道」を進み気仙沼へ、一関山目のチバ文商店から「今泉街道」を進んで奇跡の一本松へ、水沢の不断橋から

「盛街道」を進み下船渡貝塚へ。そして昨年は、金ヶ崎の駒ヶ岳の麓から「伊達・南部藩境」を進んで金石の唐丹湾へと訪ね歩き、「みちのく」のもう一つの深い味わいを五感で堪能しました。

例えば気仙沼で興味を持ったのは安波山に登り太平洋を一望、その時山頂で出会った家族が唐桑の赤畑さんという方で、珍しい苗字なので後で調べたら、ほとんどが愛媛や和歌山など関西エリアの苗字で、朝廷軍が蝦夷との戦いの時、紀州より熊野神社ご神霊を勧請して、船で唐桑にたどり着いたと伝わり、その時の兵士が唐桑に居残ったのではとのこと。一三〇〇年の歴史が息づいていますね。

「今泉街道」を巡歴した時のこと、大東町の笹の田峠を越えて今泉の町にたどりつきましたが、ご承知のように二〇一一年の東日本大震災の時、商店街のほとんどが瓦礫と化して、私が訪れた五年前も復興半ばでした。そんな状況の中に曹洞宗龍泉寺もあり、壊れた石塔の近くに檀家の皆様

寄進したと思われる石版がありました。

——我を忘れ 他を利用する 慈悲の極みなり——
天台宗の伝教大師最澄が語られた言葉です。心染みました。

「盛街道」も平泉との関連は奥深く、例えば達谷窟に立てこもっていた阿弓流為の弟の子供と言われる人首丸は江刺の木細工まで落ち伸びたが田村麻呂の一族に捕らえられて、大森山に埋められたが、現在も手厚く供養されていると言います。更に住田町まで進み、葉山めがね橋にたどれば「弁慶の足跡」「判官手架の松」があり訪れた人を和ませています。

皆様も一度「ふらり旅」してみませんか。 楽しい！それが好いんです。ではまた会う日まで。

おのぞら りゅうぞう

昭和22年 一関市千厩町生まれ
昭和46年 川嶋印刷株式会社に入社 現在顧問

讚衡蔵特別展示

金色堂の信仰と継承

菅野澄 円

金色堂建立九〇〇年を記念し、讚衡蔵で特別展 金色堂の信仰と継承を開催した。これは東京国立博物館で開催した建立九〇〇年特別展 中尊寺金色堂と連動的に企画され、同館のご協力の下に展示を構成したものである。

NHKプロモーションとの金色堂建立九〇〇年に向けた摸作は数年におよぶが、いよいよ実現に向けた話し合いが始まるはずの令和二年（二〇二〇）の初頭から未知の病気の話題が報道を賑わわせ、やがて国内での広がりとともに学校の臨時休校、四月には緊急事態宣言が発令されたことは記憶に新しい。この新型コロナウイルスの感染拡大期には、各地の公共機関・人が集う施設の閉館、ビジネスでも移動を控える期間があり、ましてや中尊寺を始め平泉町全体が参拝や観光を停止する時期もあったので、数年後の企画であつても一歩も進めることは出来なかつた。

東京国立博物館・NHKプロモーション・中尊寺が実施に向けた具体的な話し合いを本格化させるのは令和四年（二〇二二）三月で、実施まで二年を切ろうかというギリギリのタイミングであつた。金色堂中央壇の諸仏、宝物館讚衡蔵のうち金色堂に関係する文化財を概ね出陳するとすると、その間の金色堂の参拝、讚衡蔵の展示について、考えねばならない。こうして、東京国立博物館での展示と金色堂諸仏の配置、讚衡蔵の展示計画は連動的に企画が進んでいった。

讚衡蔵の企画展は、東京国立博物館所蔵等他館からの文化財を借り受けることを前提に、明治修理の資料を中心に据え計画された。奥州藤原氏時代については、讚衡蔵の常設展示でご覧いただいているところであるが、あまり知られていない鎌倉時代から明治までの金色堂について「金色堂の信仰と継承」と題し、令和六年一月十三日〜四月二十四日まで行うこととなつた。限られたスペースではあるが三章に分けて展示した。

第一章 中世の金色堂

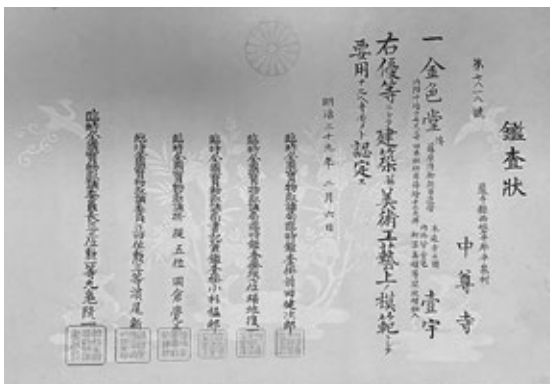
明治三十年の修理で金色堂の屋根裏から、納札・笹塔婆・五輪塔が多数発見されている。納札は参詣のしるしである。笹塔婆五輪塔は先祖（近親者）の菩提を弔う目的、あるいは自分が生きている間に死後のために善行を積み逆修のためである。五輪塔の中にはお骨の一部を入れる小さな穴の空いたものもある。

現代の我々はいつでも好きな場所に旅行をすることが出来る。中世においては、旅をするには一定の地位と資産が必要な時代。寺社参拝は旅の目的であり納札はその貴重な参拝の記念である。漆塗り金箔装飾の立派なお札を納めることでより強く仏縁を結びたいという気持ちの表れであろうか。一方で市井の人々にとつても浄土信仰、特に近親者を弔う追善の意識の中では、金色堂にすがって往生浄土をかなえたいと願うことは当然である。その庶民の思いが、数多く発見された笹塔婆からうかがえる。現代の墓地において墓標に建てられている立派な木製の塔婆と意味は同じで、違いは薄く短い木板であること。梵字と亡くなった者の名前（あるいは自分の名前）が書いてある。



中央壇正面（実写図）

Image: TNM Image Archives



臨時全國寶物取調鑑査状
明治29年2月6日

奥州藤原氏のような大檀越が不在となったのちでも、あるいはそのような中心的存在がいなかった故に、人々の浄土への渴望が、金色堂への信仰となつてあらわれたのかもしれない。そのような人々との繋がりが中尊寺を支えていた。

第二章 金色堂の修理

明治三十年（三十一年）の修理は、明治政府の主導であり、全国の寺社仏閣の宝物調査と、古社寺保存法の成立、そして保存修理事業とが同時並行的に進んでいく、いかにも明治らしい気風の中進められた。岡倉天心（寛三）とフェノロサが半ば強引に全国の秘仏・御本尊を調査したことは、時代のなせる技である。金色堂の修理でも、須弥壇の切断、鉄パイプでの補強など、現代の文化財保護の観点からは考えられない施工法が寺の意向とは無関係に進められたのも事実である。今回展示した「実写図」は、東京美術学校の学生・卒業生に任せられ描かれたものであるが、工事終了後まもなく東京帝室博物館（東京国立博物館）へ寄贈されたところを見ると、必ずしも寺の意向に沿った実施では無

かったのかもしれない。明治三十年修理以前の金色堂の姿を知る上で重要な資料となっている。これらの実写図の中に木村武山の描いたものが含まれている。木村武山は明治二十九年に東京美術学校日本画科を卒業。研究科在籍中に金色堂修理の実写図作成に参加した。明治三十一年に内紛とゴシップによつて学長を辞職した岡倉天心に付き従つて隠遁した一人である。木村武山はその後、仏画の武山とも称され、彩色豊かな作品をのこしている。中尊寺に残る「鑑査状」には、そのゴシップの中心となつた九鬼隆一、岡倉寛三、福地復一の名前を見る事が出来る。

第三章 金色堂を訪れた人々

江戸時代に中尊寺を訪れた文人で真つ先に思い浮かぶのは松尾芭蕉ではないだろうか。

夏草や兵どもが夢の跡

五月雨の降り残してや光堂

一九九七年阪神・淡路大震災で、大阪の古書店中尾松泉

堂の当主中尾氏の自宅も被災した。その所蔵整理で見つかったのが芭蕉自筆本（中尾本・野坡本とも）である。この中に記載のある金色堂の句は

五月雨の年、降りて五百たび

私たちが教科書でみる『奥の細道』に至るまでには、芭蕉の計り知れない試行錯誤があったことがうかがえる。五月雨の中、金色堂にたどり着いた芭蕉の直感のようなものが感じられ、五〇〇年残ったという感慨も、こんなに腐朽が進んでしまったという感傷も伝わってくるようである。

宮沢賢治は、法華経信仰と郷土に根ざした生き様で人々の心に残る文学作品を残した。『永訣の朝』『銀河鉄道の夜』は賢治の死生観や生きることへの思いが伝わってくる。いつぼう『注文の多い料理』のようにウィットで風刺の効いた後味の作品も印象的である。

金色堂建立八百五十年の記念として金色堂前に宮沢賢治の詩碑が建てられた。

中尊寺

七重の舍利の小塔に
蓋なすや緑の燐光

大盗は銀のかたびら

おろがむとまづ膝だてば

楮しよのまなこたゞつぶらにて

もろの脇映はえかゞやけり

手触たふれ得たね舍利の宝塔

大盗は礼らいして没まゆる

素直に読めば「大盗賊も触れ得ない」のだが、一説には源頼朝を暗示しているとも賢治自身とも言われている。

今回の展示で紹介したもう一篇、

中尊寺（二）

白きそらいと近くして

みねの方鐘からに鳴り

青葉もて埋もる堂の

ひそけくも暮れにまぢかし

僧ひとり縁にうちゐて

ふくれたるうなじめぐらし

義経の彩ある像を

ゆびさしてそらごとを云ふ

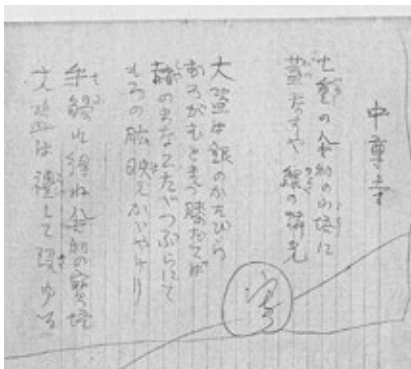
前半では、少年賢治らしい感性で境内の揺らめきや時の流れを、後半では純真で知的な少年から見た大人の象徴のように僧が登場する。私も「ふくれたる」事の無いよう節制をしているつもりだが、ここまで読み進めていただいておわかりの通りそら言には気をつけねばならない。今も昔も、中尊寺の僧はあまり変わらないようである。

信仰と継承

明治二十九年六月十五日、マグニチュード8・2とも推定される地震によって、三陸海岸に大津波が来襲した。全半壊家屋は一万戸以上、死者行方不明者は二万二千人と言われている。当山にはその後まもなく三陸地方に派遣された二名の僧侶の報告書が残っている。盛岡を経由して沿岸部に向かい、各地の惨状と供養の記録が書かれている。前



宮沢賢治詩碑



宮沢賢治自筆「文学詩篇」ノート複写

出の鑑査状の日付が二月であるから、当時は古社寺保存法登録、その後の金色堂修理等への期待や準備の時期だったと考えられる。

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が発生したことは忘れえぬ記憶である。同年六月には平泉は世界文化遺産に登録されたが、被災地への支援活動を継続する中、諸手を挙げて喜べない心境であった。その気持ちを払拭して下さったのは、世界遺産登録を祝い中尊寺境内で郷土芸能を奉演して下さった三陸の方々であった。

ロシアのウクライナ侵攻は三年目に突入しようとしている。イスラエルガザ地区の軍事衝突はその出口を見いだせずにいる。ふりかえれば鎌倉幕府の衰退とともに南北朝時代という混沌が平泉にも陰を落とした。その緊迫感が北畠顕家をして中尊寺供養願文の書写をさせたのである。

令和六年元日、能登半島地震及び津波が発生し、二百四十名以上の方が亡くなり、今なお数万人の方々々が避難生活を余儀なくされている。修正会から金盃までの法要行事も、そして東博での展示会の為の諸仏・寺宝の準備作業中も、我々僧侶・学芸員・運営運搬スタッフの誰の心にも被災地

法華大会廣学堅義について

菅野 靖 純

昨年、四月に帰山してからもう一年が過ぎようとしています。日々が目まぐるしく過ぎていったように感じます。僧侶であることを意識せずに中尊寺で過ごしていた日々と、見えてくるものや感じるものに違いを改めて感じた一年でもありました。その一年の中で特に記憶に残ったことの一つとして、「法華大会廣学堅義」があります。これは、我々天台宗の総本山である比叡山で四年に一度行われる古儀の法会です。

「法華大会廣学堅義」とは、今上陛下の御代理である天皇の御使が聴聞されることから、勅会と呼ばれ、無量義經一卷・妙法蓮華經八卷・観普賢經一卷の法華三部經あわせて十巻についての論義を行う「法華十講」と、十講終了後に夜儀として、夜に行われる「廣学堅義」の二つの法会によって構成されています。この起源としては、伝教大師最澄が天台大師（智顛）の法門報恩に十一月に始めた霜月会

への思いはあつたように感じた。

悲しいかな人類の歴史は、自然災害・疫病と戦争の連続である。ただ同時に、亡くなった先人を思い、先人が残した思想や物を護り伝え、今このかけがえのない一瞬を共に生きる人を大切にするのも人である。ある人は金色堂・阿弥陀如来・藤原公の功德にすがり、ある人は筆を取りその精緻な様を書き写す。ある人は光と影をフィルムに撮り、ある人は言葉を紡ぎ我々に残してくれた。九〇〇年の時を越えた継承、それはかけがえのない時間と空間の共有。金色堂の信仰は今もこれからも引き継がれてゆく。

展示監修をお引き受けいただいた大正大学加島勝先生、資料展示にご協力をいただいた中尾松泉堂様、宮沢賢治記念館様に感謝申し上げます。

（管財執事）

と、最澄が入滅後に慈覚大師円仁をはじめとするお弟子たちが、伝教大師の報恩のために六月に始めた六月会にあり、これらの両会に堅義が付随して行われたとのこと。

まず法華十講については、具体的には問者が講師に教えるを請うかたちで問答を繰り返し、これによって法華經の論義が行われるという論義法会になります。この法華大会における十講の講師は、次期探題になる学徳兼備の已講がこれを勤められます。

一方、廣学堅義は自分の宗派だけのことではなく、他の宗派についても学び、法華經などの決まった經典以外にも広く学んだ上で、正当な義を立てることを求められます。この「義を立てる」という堅義は、天台宗の僧侶としての最終試験を意味しています。具体的には探題が問題を出题し、五人の問者から矢継ぎ早に質問がなされ、それに受験者が答えるという形式の論義法要で行われます。

さて、この受験者を堅者と呼ぶのですが、私もこの堅者の一人になり、令和五年は十月一日から六日までの六夜のうち、私はその第三夜の堅者でした。数日前に比叡山に登り、廣学堅義において使う大会節などの読み方、唱え方な

どを教えていただき、それらを短い時間の中で必死に自習しました。法会は大講堂で執り行われます。今まで何度か訪れたことのあるお堂であるにも関わらず、今まで見てきたものとは全く違うと感ずるような場の雰囲気緊張しました。

いざ自分の番になると、大講堂の西側の堅者口から紐につかまって飛び込みます。お堂の中は暗く蠟燭の光しかありません。非常に厳かな雰囲気の中、先導の方に従って本尊の大日如来に一礼。そして探題へ一礼し高座へ登るのですが、見た目以上に非常に高く感じ、これから自分が堅者として答えるのだという引き締まった気持ちになりました。「表白」を読み了えると、五人の問者からの問いが来ました。このときのことを質問の矢が放たれると表現される人もいましたが、確かに矢のように鋭く問うてくる問者もいましたが、いざ始まってみると、それまで感じていた緊張も忘れて、ひたすら全力で答えるだけでした。

廣学堅義が終了し、合格すると、はなだ繚帽子をつけることが許されます。これはかつて天台大師が隋の皇帝である煬帝ようたいていより繚袖を与えられたことにならつて、伝教大師が霜月会

この、二年間を振り返って

佐々木 祐 輔

私が寺に入りましたのは、令和四年の四月でした。一般家庭（在家）の私が中尊寺の一員として勤め始めて五ヵ月経った時、比叡山延暦寺の行院に入りました。私は、大正大学や叡山学院で仏教の勉強をしていないので、先輩方に言われたとおり般若心経だけを覚えて、山に登りました。十一人と人数が少なく、年齢も二十歳だった私よりも年上の方々しかいないなど、本当にこれで大丈夫なのかと不安な気持ちでいっぱいでした。

行院では二ヵ月（六十日間）修行します。最初の一ヵ月は前行ぜんぎょうと言われ、基本となるお経の読み方や儀式作法などについて教えていただきます。後の一ヵ月は四度加行、密教の修行で、毎日朝二時に起床、冷水を浴びて体を清めてからお堂に入り、護摩を焚きます。

最初は右も左も分からないことだらけでしたが、日が経つにつれ普段の法要などで先輩方がお経を読み始める前に

を始修せられたとき桓武天皇から繚帽子を賜ったという故事にちなんだものだそうです。中尊寺の年上の先輩方は法要の際この帽子をつけているわけですが、自分がそこまでの人間になったわけではないし、少々気恥きぢずかしく感じます。

伝教大師最澄は、『山家學生式』において、「悪事向己。好事與他。忘己利他。慈悲之極」と書いています。これは、「悪事を己に向へ 好事を他に与え 己を忘れて 他を利するは 慈悲の極みなり」と書き下されるかと思えます。この理解として、悪事とは人がやりたがらないこと、好事とはその逆という解釈があります。この解釈を私もしているのですが、この度、繚帽子をつけることを許可頂いたことを一つの機会として、常日頃一週間を振り返ってみてもこれを実践できたと思うように過ごせればと願っています。また、悪事を悪事のままにせず、好事とするためにどのようにしていったら良いかを考えていけるように周りに目を向け、繚帽子に恥はづかしい僧侶であることができればと思っています。

（瑠璃光院 法嗣）

しているのはどんな意味があるのか、仏器の呼称や置き方など、行院に来る前に見たり聞いたりしたことがこのことだったのかと実感しました。どうにか無事、二ヵ月の修行を満行しました。

行院での生活がやっと終わり、寺に戻ると今度はお正月に向けて動き出していました。中尊寺で勤め始める前に何度かお手伝いをしていましたが、最初から最後まで勤めたことがないので分からないことだらけでした。慌たあわたしく約一ヵ月を過ごし年が明けました。新年には修正会（正月に修する法要）が元日から八日まで続きます。夜は結衆（修養階梯にある若年僧）として開山堂での堂籠りが五日まで、堂籠りが終わりますと今度は、六日から二月の節分会まで寒行（托鉢）で、毎日、午後五時から山を下りて平泉町内を鈴を振りながら巡ります。

やっと二ヵ月修行して帰ってこれたのに、休む暇もなく次から次へと覚えることが多く大変だなと思っていた時、行院に行く前に住職から「帰ってきたら忙しくなるよ」と笑顔で言われたことがこのことだったのかと、今思うと溜息が出ます。

節分会が終わり、三月には入壇灌頂(灌頂の受者(弟子)になること)・開壇伝法(灌頂の阿闍梨(師匠)になる)を履修するために茨城県の古刹千妙寺へ行き、九月には円頓大戒(天台宗僧侶が戒壇院で円頓菩薩戒を受戒する)でまた比叡山へ。十月には更に法華大会(法華十講の法要と、その後に夜まで行われる広学豎義の二つで構成されている)で比叡山に登りました。

こうして、行院から約一年で受けなければいけない修行を一通り済ませることが出来て、ようやく、天台宗の僧侶としてのスタートラインに立てた思いです。

様々なことを経験し、修行はスポーツと一緒にチームプレーイダと思いました。私は高校の時にラグビーをしていました。ラグビーのキャッチフレーズである、One for all All for one(一人はみんなのために、みんなはひとりのために)という言葉があります。この言葉のように助け合いながら取り組んでいくことが修行でも大切なのではないかと思っています。またこれは修行だけではなく、日常生活でも同じで、人が誰の手も借りずに生活していくことが出来ないように、家族や友だち、周りの方々と手を取り合い

コロナ禍を糧に

破石晋照

二〇二〇年、新型コロナウイルスの全世界的流行は、私たちの生活に大きな影響をもたらしました。日常生活はもとより、長引く感染拡大は多くの産業に変化をもたらし、いつ終わるともわからない流行と、その抑制のための制限に戸惑いと不安を感じながらの毎日を過ごすこととなりました。この感染症が五類と分類されることとなったのが二〇二三年ですから、それを一つの区切りとすれば、実に足掛け四年の間、私たちはウイルスによる生活制限を受けていたということになります。

その四年間のなか、観光業も大きく制限を受け、そして変化することとなりました。緊急事態宣言の下での参拝停止や、その後の境内への感染対策など、僅か数カ月のうちに多くの対応と変化を余儀なくされました。そして世界的な渡航制限・入国制限。あるいは、第三波等と呼ばれたさらなる全世界的拡大によりビジネスや留学なども含めた

ながら生きていくことが大切なのだと思います。

ましてや今は、若い人が少なく高齢者が多い時代になっています。私の身近なお店や会社でも、人手不足になりお店や会社を閉じて終わりにしてしまう所をよく見かけます。人手不足はお店や会社だけではなく、我々にも関わってきている問題点の一つです。

このような問題点を考えながら生活していくためには、もちろんお寺の伝統的なやり方を続けていくことはとても大切なことだとは思いますが、昔の考え方だけではなく、今の若者の考え方・新しい考え方も取り入れたお寺にしていかなければいけないと思います。

中尊寺で勤め始め、二年目の今年。恒例の法要や、座禅、写経、お檀家の葬儀、そして中尊寺の古式に則ってお能のお稽古、結婚式のお手伝いなど、あれもこれも先輩の隣で勉強させていただいています。まだまだ分からないことだらけですが、一つ一つ自信を持つてお勤めできるように修行していきたいと思います。

(積善院 法嗣)

すべての目的での入国制限が行われましたから、かつてたくさんいらっしゃっていた海外からの観光客はゼロとなり、再び多くの観光客でにぎわう境内を想像することすら難しい状況でした。このような渡航制限は二〇二一年になつてもおさまらず、無観客にて行われた東京オリンピックが開催された二〇二二年から、ようやく、段階的な緩和となりました。そして新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザと同じ五類へと分類が変わった二〇二三年、当山を訪れる外国人観光客の数は春先から急激に回復し、夏を迎えるころにはコロナ以前と変わらない、あるいはそれ以上の水準となりました。待ちに待った海外旅行の解禁というエネルギーはもちろん、円安などその他様々な状況が人々の旅行熱を後押しして海外からの観光客の増加につながったと考えられています。それにしても、他の地域の回復を上回る勢いで外国人観光客が増えていく実感がありました。

昨春秋、久しぶりに台湾での観光客誘致活動に参加しました。中尊寺を訪れる外国人観光客のほとんどは台湾からのお客様で、以前は毎年のように誘客に向いていたので

(金剛院副住職)

能楽堂の杉

日本各地の野外能楽堂に出かける機会がありました。白山神社能楽堂は特別な舞台空間です。初舞台を踏んでから幾度も上がった舞台なので、私だけにとつて特別な空間に感じる能楽堂と想っています。能楽師の先生や観能にいらしたお客様からも伺ったことがありますが、やはり白山神社能舞台には特別な空間を作る「何か」があるのだと思います。神社の境内に植えられた杉の木たちもその理由の一つです。いつも能楽堂に向かうため、白山神社の鳥居をくぐり、杉の太木によって作られた日陰道を歩きまわす。日常の世界から特別な神聖な場所へと誘われるような不思議な気持ちになり、やがて茅葺屋根の

能楽堂が姿を現します。能楽堂の周囲も杉の太木で囲まれ、野外でありながらも開放されているわけではなく、区切られた空間のよう。まるで屋内の能楽堂のような密集感や一体感があり、役者も屋内能楽堂のような心持ちで演じることができるとは思いません。私は初舞台の稽古の時に、この杉たちを舞の目印とするよう教わりました。杉が正しく見えているということは、舞台の正しい位置に立つことができている。杉たちは舞台上で私を安心させてくれる存在でした。そして何となく能楽堂に立つうちに、今度は逆に正しい位置に立っているのかどうか、杉たちから見張られているように感じるようになりました。そういえば：かつて藤原成通卿



という蹴鞠の名人がいたそうです。何となく蹴鞠庭に立ち、やがて蹴聖と呼ばれました。ある日成道卿のもとへ『蹴鞠の精』がやって来て、成道卿のさらなる上達を約束してくれたらしいのですが、その蹴鞠の精たちは、どうやら蹴鞠庭の木からやってきたらしいのです。もしや今年、できれば来年あたりには、杉の太木をつたって私にも『お能の精』がやってくるなどという未来があるのでしょうか。

すが、五年ぶりのことでした。かつて誘客活動をしていたころに知り合いとなった台湾人の中には、やはりコロナウイルスの影響で旅行業を離れてしまった方や、長い間に音信不通になってしまった方もいましたから、以前とは違う気持ちを抱えての渡航となりました。

台北についた夕方、飛行機の窓からはかつてと同じ街並みが見えました。地下鉄に乗り町の中心へ出る。以前のよゆうな賑やかで活気にあふれた台北です。どうしてもコロナ蔓延時の国際報道が頭の中にあるものですから、実際に自分の目で見るまでは安心できていなかったのですが、以前と変わらぬ活気に満ちたその風景に懐かしさと安心を感じたのです。台北では数十件の旅行会社の方々とお会いしましたが、懐かしい再会もある中で、皆それぞれに「観光業ができる嬉しさにあふれていました。

久しぶりに会った旅行会社の知り合いと話をする機会がありました。近況報告ということもかねて、二〇二三年は以前と同様以上に、台湾からの参拝客が来ている話をしました。すると彼は「確かに東北旅行をする数は増えた。円高や他地域のオーバーツーリズムという理由もあるかもし

れないが、コロナ感染症を経て旅行社の考え方が少し変わったのかもしれない。安全で静かに、自然や文化を感じる旅行と、渡航先が以前よりも選ばれる傾向にある。」という。自然の中で季節ごとに変わる美しさを楽しみながら文化に触れることのできる場所……。普段いろいろな行事や企画を考えるとき、どうしても目前のことにだけ目が向き、その全体像を考えないままに取り組みがちである。ポストコロナの観光誘客のために大きなテーマを持って、世界中から訪れる観光客が期待し楽しめる地域を作り守っていかねばならないと思いました。

(金剛院副住職)



〔関山句囊〕

(令和五年六月二十九日 於中尊寺)

〈第六十二回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

(當日句入選)

青葉闇抜けて浄土や光堂

(大会長賞)

* 渡辺誠一郎選

特選 平泉 岩淵眞理子

卯塊うんかひを小枝に預け青蛙

(中尊寺賞首賞)

特選 気仙沼 熊谷 房子

玉葱を世界遺産の空に干す

(毛越寺賞主賞)

特選 奥州 小野寺昭次

今昔の夢を転がしほととぎす

秀逸 一関 三浦 寿子

落ちそうで落ちぬ卯塊あをがへる

秀逸 奥州 伊藤さとる

沙羅の花いつも淋しい耳のうら

秀逸 奥州 羽藤 焼石

行方なきががんば舞ひ出る能舞台

秀逸 滝 沢 高橋千衣子

下闇に燭を継ぎ足す和讃かな

秀逸 大崎 木村 一枝

沙羅の花いつも淋しい耳のうら

(岩手県知事賞)

* 白濱一羊選

特選 奥州 羽藤 焼石

万緑や礎石に人の積む小石

(河北新報社賞)

特選 一関 森 正江

ばあちゃんはいやいや期なり五月晴れ(岩手日報社賞)

特選 宮城県 加藤無辺子

関伽の水とて滴りを桶に受く

秀逸 一関 小野寺東子つふこ

梅雨晴や浄土の亀の甲羅干し

秀逸 一関 小岩 秀利

雨蛙縫る寺苑の消火栓

秀逸 登 米 及川ななを

祈るたび散華とならむ古代蓮

(岩手県議会議長賞)

* 小畑柚流選

特選 気仙沼 熊谷 房子

今昔の夢を転がしほととぎす

(岩手日報社賞)

特選 一関 三浦 寿子

千年の杉の秀に舞ふ梅雨の蝶

(中尊寺賞)

特選 大崎 木村 一枝

九百年非戦や清衡苔の花

秀逸 平泉 鈴木 四郎

木下闇悲秘史を伝ふる光堂

秀逸 平泉 ほくれい学

束稲山の影さかしまに青田風

佳作 一関 佐藤 冬扇とうせん

玉葱を世界遺産の空に干す

(平泉町教育長賞)

* 小林輝子選

特選 奥州 小野寺昭次

祈るたび散華とならむ古代蓮

(岩手日日新聞社賞)

特選 気仙沼 熊谷 房子

五月雨も過客平泉の日なり

特選 盛岡 兼平 玲子

もののふの出さうな古刹梅雨湿り

秀逸 奥州 齋藤 瑞子

ひそやかに混みゐて涼しひかり堂

佳作 奥州 大石 文雄

今昔の夢を転がしほととぎす

(平泉町議会議長賞)

* 照井 翠選

特選 一関 三浦 寿子

みちのくの深き恨みも万緑に

(岩手日報社賞)

特選 新潟県 中村 宮子

草いきれ吸はせてみたき木乃伊かな(岩手日日新聞社賞)

特選 盛岡 齋藤 雅博

梅雨の闇燐寸照りて僧消ゆる

秀逸 盛岡 深澤 肇

梅雨湿り襖波打つ中尊寺

秀逸 平泉 ほくれい学

玉葱を世界遺産の空に干す

(平泉観光協会会長賞)

*成田一子選

特選 奥州 小野寺昭次

音のしてもり青蛙卵生む

(河北新報社賞)

特選 登米 藤野 尚之

沙羅の花いつも淋しい耳のうら

(岩手日日新聞社賞)

*白濱一羊選

特選 奥州 羽藤 焼石

十葉も世界遺産や月見坂

秀逸 奥州 遠藤カオル

甘酒を嘔て句作や平泉

秀逸 大崎 穴戸 幸江

戦ひに得るものはなし梅雨の蝶

佳作 北上 小笠原志保子

(応募句入選)

(投句総数 八八八句)

*渡辺誠一郎選

天 草いきれ不意に濃くなる蝦夷の血

青森市 加藤健一郎

句評 夏の強烈な光によって、茂った草は蒸すような熱気を放つ。この息苦しくさえる草いきれは、みちのくの山野に生きた蝦夷のエネルギッシュな姿に重なる。

「不意に濃くなる」とは、草いきれによって、蝦夷の血が、あたかも目覚めたかのようだ。

地 古代蓮一花のなかにある浄土

紫波町 三島 黎子

句評 蓮の花はインド原産で、仏教ゆかりの花。崇高な凛とした姿は、極楽浄土にはよく似合う。掲句はさらに、一つの花のなかにも浄土を見る。浄土がさらに鮮明に確かなものとして浮かび上がる。

人 たんぼぼを摘んで母から離れゆく

一関市 小野寺束子

句評 どこかメルヘン的だが、「たんぼぼを摘む」という具体的な情景から、子が母から自立して離れていく時の絶妙な心象を、うまく言い当てる。

秀逸

裏木戸へ風の寄せゆく春落葉

北上市 深澤 洋子

花の雨洗ふ精舎の鬼瓦

大崎市 木村螢雪子

*白濱一羊選

天 人を待つリラの匂ひの濃きところ

大崎市 穴戸 幸江

地 落し文いくつも拾ふ義経堂

一関市 小栗不死実

人 旅終へしごとふらここを降りにけり

奥州市 郡司 山吹

秀逸

平泉の日写経に多き空の文字

盛岡市 工藤 陽子

黄水仙燭の如くに法の庭

高松市 岡田 貞幹

*小畑流選

天 古代蓮一花のなかにある浄土

紫波町 三島 黎子

地 旅人と呼ばれ一夜の春惜しむ

長崎市 西 史紀

人 螢火は武者らの魂か古戦場

秋田市 岩谷 塵外

秀逸

竹百幹ざわめく古刹青葉風

平泉町 岩淵眞理子

み仏の御手やはらか雪解風

大田原市 小滝 威

*小林輝子選

天 黄蓮の花の瞬く蓮台野

平泉町 岩淵 洋子

地 藤原祭馬の尻尾を三つ編みに

平泉町 岩淵 洋子

人 哭まつり散華ひらりと燕来る

奥州市 中村セイ子

秀逸

さそはれて一つの傘にあやめ園

奥州市 羽藤 焼石しょうせき

平安の礎石に遊ぶ夏の蝶

奥州市 千田 勝子

*照井 翠選

天 炎ほむらより生れし浄土や松の芯

一関市 佐藤 光枝

地 鷹鳩と化して戦禍の地を目指す

盛岡市 兼平 玲子

人 涅槃図の嘆きに吾も入りたく

奥州市 佐藤 年未としすえ

秀逸

夕焼を飲み干してなほ光る海

常陸太田市 舘 健一郎

花はな蕊しびの闇ぼつかりと落椿

一関市 石川 静江

*成田一子選

天 金鶏山もろとも雉のほろろ打つ

奥州市 岩渕 正力しょうりき

地 新しきみちのくへまた耕せり

大崎市 佐々木克狼かつら駄

人 百才の選ぶいろいろ種袋

一関市 渡部 容子わたなべ

秀逸

みちのくに折々のゆめ田を返す

一関市 佐藤 光枝

水すまし世界遺産の守り主

奥州市 千葉 眞子まこと

(秀逸、佳作は編者が適宜に掲出)

岩手県内 小・中学校の部

(投句総数六六〇句)

岩手県内小学校

特選

桜ちる奥州リーグがんばるぞ

金ヶ崎町永岡小学校 六年 高橋 漣

桜散るぜったい勝つぞリーグ戦

金ヶ崎町永岡小学校 六年 新岡 春馬

春の朝カーテン開けて体そうだ

金ヶ崎町永岡小学校 六年 高橋 奏羽

岩手県内中学校

特選

黄金の歴史と文化花うるし

一関市舞川中学校 一年 佐藤 心咲

泡弾け喉も弾けるラムネの音

一関市舞川中学校 二年 千葉 大祐

綱引きや足を踏ん張る夏の空

一関市舞川中学校 三年 佐藤あかり

平泉小学校

特選

千年の栄華をおもう蓮の花

六年 佐々木 蓮

セミはなくみじかいいのちはてるまで

四年 千葉 蒼士

きれいだなしだれざくらとあおいそら

四年 千葉 華穂

長島小学校

特選

ドキドキのにゅうがくしきへんじする

一年 三浦 悠花

須川山本寺ぎつね夏近し

三年 千葉彩加里

もも色が緑に変わる穀雨かな

六年 加藤 実咲

春陰の関山古鐘音微か

「たばしね」三月号 佐々木邦世

平泉中学校

特選

藤原の思いと共にかどびもゆ

一年 齋藤 蒼彩

夏空に響く鐘の音中尊寺

三年 西米 彩花

菜の花に見送られつつ通学す

一年 及川 二子

第六十三回 平泉芭蕉俳句大会

令和六年六月二十九日(土)

会場 毛越寺

特別選者 対馬 康子 先生

〔麦〕会長 〔天為〕顧問
角川俳句賞選考委員)

東日本大震災物故者十三回忌追善法要後、午後二時四十分、久し振りに古鐘の、鎮魂の響き。

打ち揃ひ得度の式や蝉時雨

「たばしね」八月号 岩淵眞理子

一山の僧やご縁の人達が「うち揃ひ」見守る中、戒師の前に身を向けて誓いを。静まった空気に蝉時雨が好いです。ね。

金色堂見上げておりぬ余り苗

「河北俳壇」 仙台市 當摩さとし

高野ムツオ選評

中尊寺の麓にある田んぼ。その一角に余り苗が据えられ、植えられた苗ともども金色堂を見上げている。昔と変わらない光景であろう。当時の農民の姿とも重なる。

〔関山歌籠〕

〈第四十三回西行祭短歌大会〉

(令和五年四月二十八日)

*藤原龍一郎選

看護する力を吾に与へ給へと母を見守る病室
で祈りぬ (中尊寺貫首賞)

大船渡 橋爪 敬子

平泉の駅のホームに子育てのツバメの家族に
会える春来る (平泉町長賞)

青森県 音喜多京子

翔ちゃんの積み木ころがり通せんぼ悪戦苦闘
の仔猫ミーちゃん (平泉観光協会会長賞)

宮城県 遠山 勝雄

嫁ぎ来て八十路半ばを今もなお花巻雑を愛し
く飾る (岩手日報社賞)

北上 多田 テル

野ぶどうの蔓断ち切れば絶え間なく夕日含み
てしたたる樹液 (IBC岩手放送賞)

奥州 安部 謙

わたしには水あり灯ある日常を心つましくウ
クライナ思ふ (岩手日日新聞社賞)

盛岡 照井 方子

佳作

十二年除染成らざる田畑を打てる吾にも喜寿
が近づく 福島県 今野 金哉

若き日の頑固消え失せやわらかき爺になった
と言われる傘寿後 宮城県 千葉 秋夫

三人の人肌を知る洗濯機午前四時より渦を巻
きそむ 静岡県 高田 圭

たつぷりと作れるおでんを寒の夜に帰る息子
に持たせやりたり 東京都 森田小夜子

雪解けの水と一緒に里に降り田の神小さき社
に住みぬ 奥州 小野寺洋一

七歳の手紙に歪んだクワガタの折紙ありて吾
の頬ゆるみぬ 一関 阿部 昭代

鮮やかな緑に変はる新わかめ磯の香りが友か
ら届く 紫波 佐々木さやか

縄跳びの輪に入る間合い測るごと友の早口途
ぎるるを待つ 和歌山県 松田 容典

もう一度金色堂を見たいとふ願望のあり卒寿
の夫 「読売歌壇」 我孫子市 増田千代子
小池 光選評
奥州平泉、中尊寺の金色堂。むかし見て感動深かった。
卒寿のいま、もう一度見たいと。願望かなえられますよ
うに。

第四十四回 平泉西行祭短歌大会
令和六年四月二十六日（金）
会場 中尊寺 光勝院
特別選者 ^{ひがし} 東直子 先生
(歌人、作家)

新刊紹介

(令和五年一月〜十二月)

〈書籍〉

『語り継がれる 明治天皇の東北・北海道ご巡幸』
銀の鈴社 著者：伊達宗弘 十六

〈雑誌〉

『小学館ウィークリーブック 隔週刊 古寺行こう 通巻24号 中尊寺』
小学館 発行・編集人：小坂真吾 一・二十四

〈報告書〉

『平泉文化研究年報 第23号』

発行：岩手大学平泉文化研究センター・岩手県
編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・二

『岩手県文化財調査報告書第166集 平泉遺跡群発掘調査報告書
柳之御所遺跡 ―第83次発掘調査概報―』

発行：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・二十四



『平泉学研究年報 第3号』

発行：「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会
編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・二十四

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集』

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書 平泉野遺跡・白山社及び駒形根神社
発行・編集：一関市教育委員会 三・二十四

『岩手県平泉町文化財調査報告書第143集』

特別史跡無量光院跡第32・42次発掘調査報告書
編集・発行：平泉町教育委員会 三・二十九

『岩手大学平泉文化研究センター年報「第11集」』

編集・発行：国立大学法人岩手大学平泉文化研究センター 三・三十

『岩手県平泉町文化財調査報告書第144集 平泉遺跡群発掘調査報告書』

祇園II遺跡第19次 志羅山遺跡第119次 白山社遺跡第11次
毛越寺跡第20次 無量光院跡第48次

編集・発行：平泉町教育委員会 三・三十

『岩手県平泉町文化財調査報告書第145集』

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅳ — 第13次調査 —
編集・発行：平泉町教育委員会 三・三十一

『令和4年度 骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

発行：一関市博物館 三・三十一

『平泉石造物調査研究報告』

編集：「平泉仏教文化の諸相とその社会的基盤に関する資料学的研究」
石造物班 八・三十一

〈図録〉

『建立900年 特別展 中尊寺金色堂』

発行：NHK、NHKプロモーション
編集：東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション 六・一・二十三



Image : TNM Image Archives

御神事能番組

令和五年五月四日

法楽
古実式三番

開	口	佐々木五大	大鼓	三浦	章興
祝	詞	佐々木亮王	小鼓	菅野	靖純
若	女	清水	笛	菅野	澄円
老	女	破石	晋照	後見	千葉
					光聰

半能 シテ 北嶺 澄照 太鼓 三浦 章興
 竹生島 ワキ 佐々木秀厚 大鼓 佐々木宥司
 ワキツレ 佐々木祐輔 小鼓 菅原 光聰
 笛 清水 秀法

秋の藤原まつり 中尊寺能 十一月三日

連吟 平泉 二葉きらり園 園児二十四名

鞍馬天狗

老 松

仕舞 一関喜桜会

班 女 佐々木典子

井 筒 佐々木文子

素謡 シテ 三浦 博

三井寺 ワキ 小山 恒則 一関喜桜会
ワキツレ 佐藤 健也

能
 猩 々 シテ 佐々木五大 太鼓 三浦 章興
 ワキ 佐々木秀厚 大鼓 佐々木宥司
 小鼓 菅原 光聰
 笛 清水 秀法

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成四年十二月一日～令和五年十一月三十日

□ 令和四年

十二月七日～十二月八日 於天台宗務庁

天台宗中央布教研修会第二回役員会

瑠璃光院 菅野 康純

十二月十五日 於天台宗務庁

天台宗人権啓発公開講座 委員 三浦章興参加

□ 令和五年

六月六日 於中尊寺光勝院

令和五年度第一回陸奥教区教学研修会

六月二十六日 於山形県上市市

布教師会東北・北海道地区協議会・総会・研修会

瑠璃光院 菅野 康純

七月十四日 於中尊寺光勝院

一隅を照らす運動陸奥教区本部研修会

山内より四名参加

十月八日 於第三部 蓮乗院

一隅を照らす運動陸奥教区本部托鉢会

山内より十八名参加

十月二十三日～二十五日 於郡山市内

令和五年度教師研修会A群

円教院 千葉 快俊・積善院 佐々木祐輔

十月二十七日 於中尊寺光勝院

令和五年度第二回陸奥教区教学研修会

講師 中尊寺 奥山元照・圓乗院 佐々木邦世

山内より十八名参加

十一月二十四日～二十九日 於比叡山延暦寺

総本山駐在布教 瑠璃光院 菅野 康純

□ 役職任免

(令和五年十月一日)

陸奥教区宗務所副所長・一隅陸奥教区副本部長

大長壽院 菅原 光聰

陸奥教区地方選挙管理委員会 委員

観音院

清水 秀法

陸奥教区地方選挙管理委員会 予備委員

大徳院

佐々木有司

一隅を照らす運動陸奥教区本部 理事長

利生院

菅野 宏紹

陸奥教区宗務所 財務主任

円教院

千葉 快俊

教務主任

眞珠院(副)

菅野 澄円

庶務主任

金剛院(副)

破石 晋照

陸奥教区布教師養成所 所長

中尊寺

奥山 元照

事務局長

瑠璃光院

菅野 康純

寺院教会収入額教区審議会 委員

圓乘院(副)

佐々木五大

陸奥教区名誉住職推薦委員会 委員

千養寺

佐々木秀厚

陸奥教区人権啓発委員会 委員

法泉院

三浦 章興

(令和五年十月二十七日)

一隅を照らす運動陸奥教区本部 理事

瑠璃光院

菅野 康純

□ 住職任命

(令和五年六月一日)

大長壽院住職

菅原 光聴

□ 褒賞

(令和五年六月一日)

住職五十年勤続

眞珠院

菅野 澄順

住職五十年勤続

積善院

佐々木仁秀

□ 学会

(令和五年五月十六日)

講習

眞珠院

菅野 澄順

□ 教師補任

(令和五年三月二十三日)

小僧都

瑠璃光院(嗣)

菅野 靖純

僧正

利生院

菅野 宏紹

権僧正

大長壽院

菅原 光聴

権僧正

眞珠院(副)

菅野 澄円

権大僧都

観音院

清水 秀法

小僧都

地藏院(嗣)

佐々木圓了

□ 経歴行階履修

(令和五年八月一日～九月五日)

四度加行履修

瑠璃光院(嗣)

菅野 裕康

□ 得度履修

(令和五年七月二十六日)

眞珠院(嗣)

菅野 澄晃



一隅を照らす運動全国一斉托鉢 陸奥教区 蓮乗院 令和5年10月8日

浄財御奉納者 御芳名

令和四年十二月〜令和五年十一月

- 一関信用金庫平泉支店 支店長 藤森伸也様 三万円
- (有)千葉恵製菓 代表取締役 千葉正利様 二十万円
- 久世旭如様 五万円
- (株)空地音ハーモニー様 五万円
- (有)平泉観光写真社 代表取締役 高橋拓生様 五万円
- 立正佼成会 花巻教会様 三万円
- 吉田節子様 四万七千円
- 西福寺様 五万円
- (株)日本観光アセットマネジメント 五万円
- 千葉鴻儀様 五万円
- 鈴木紀子様 三万円
- 浄土宗教誨師会様 三万円
- 國華清和会様 十万円
- 佐々木宗生様・佐々木多門様 三万円
- 瑞巖寺様 三万円
- 菊池國雄様 五万円
- 浄土宗 岩手教区教務所様 五万円
- 明洲 吉祥院 中国寧波様 十三万円



中尊寺神事能地謡 (喜桜会)

- 亀井広忠様 三万円
 - 菊地恵子様 五万円
 - 茶道裏千家 淡交会岩手南支部様 十万円
 - 学校法人 駒込学園様 三万円
 - 最明寺様 三万円
 - 日産グローバル(株)様 五万円
 - 東方書道院様 十万円
 - 安田悦郎様 三十万円
 - 社会法人大慈会 理事長 粕賀廣洋様 五万円
 - 佐藤有年様・佐藤麗子様 三万円
- (順不同)

浄財募金

- トルコ・シリア地震災害義援金 七五九、四七〇円
- ハワイ・マウイ島大規模火災災害義援金 七八六、一六四円
- 二〇二三年モロッコ地震救援金 一、〇二五、五六六円

不動尊篤信御奉納者 御芳名

令和四年十二月〜令和五年十一月

中野区	中村武司様	十六万円	一関市	(株)精茶百年本舗様	三万円
奥州市	(株)板宮建設 代表取締役社長 板宮一善様	十四万円	一関市	氏家 徹様	三万円
一関市	(有)豊隆軌道 会長 千葉幸八様	七万円	一関市	東北建工企業(株) 今野幸宏様	三万円
一関市	橋本友厚様	七万円	一関市	(有)豊隆軌道 代表取締役 千葉美樹様	三万円
平泉町	(株)北都高速運輸倉庫東北 小野寺勝彦様	七万円	一関市	山平様	三万円
青森市	佐々木幸子様	六万二千元	一関市	(株)東北鉄興社 佐野 聡様	三万円
仙台市	佐々木京華様	五万円	一関市	橋本晋栄様	三万円
秋田市	木村英夫様	五万円	一関市	(株)アーク 橋本晋栄様	三万円
伊丹市	やなぎ金属産業(株) 柳 一根様	五万円	一関市	大和建工(株) 千葉哲也様	三万円
千葉市	渡邊良弘様	四万五千元	塩釜市	庄内千恵様	三万円
一関市	小野寺清一様	四万円	奥州市	岩淵 進様	三万円
栗原市	澤邊幸隆様	四万円	花巻市	藤原伸一郎様	三万円
平泉町	(株)フタバ平泉 新賓泰生様	四万円	一関市	佐藤照子様	三万円
新宿区	(有)シー・エヌ・エス 中村武司様	三万五千元	名取市	(株)OurVoice様	三万円
平泉町	川嶋印刷(株) 代表取締役社長 菊地慶高様	三万五千元	栗原市	(有)金成工務店様	三万円
愛知県 蒲郡市	羽田喜宣様	三万円	仙台市	(株)橋場総設 泉 笑子様	三万円
一関市	佐藤貴理様	三万円	旭市	伊藤久美子様	三万円

銚子市	石毛裕之様	三万円	奥州市	岩淵 進様	季每御供物
銚子市	(株)イクオリティー 石毛裕之様	三万円	盛岡市	蟻川ひろみ様	季每御供物
八王子市	村上秀行様	三万円	大崎市	高橋光弘様	季每御供物
真岡市	(株)丸茂様	三万円	大崎市	きよはら美容院 佐々木則雄様	季每御供物
平泉町	一関信用金庫 平泉支店様	三万円	きたき市	細淵ます美様	季每御供物
本吉郡	山口 昇様	三万円	栗原市	小出悠成様	季每御供物
黒石市	(株)池田不動産 池田裕章様	季每御供物	奥州市	小野智真子様	季每御供物
黒石市	(有)セイリュウ 佐々木政秀様	季每御供物	平泉町	東山園 千葉時胤様	季每御供物
奥州市	佐々木 誠様	季每御供物	一関市	(有)豊隆軌道 代表取締役 千葉美樹様	季每御供物
青森県 三戸郡	(有)工銀青果 工藤一男様	季每御供物	登米市	長尾靖樹様	季每御供物
新潟市	松原晴樹様	季每御供物	大崎市	渡邊憲幸様	季每御供物
水戸市	つくし 藤枝恵枝子様	季每御供物	栗原市	渡邊奈夢様	季每御供物
平川市	長尾智子様	季每御供物	青森市	唐牛正治様	季每御供物
二戸市	(有)岩食商事 米沢 修様	季每御供物	遠田郡	熱海 章様	季每御供物
大仙市	(有)ベル美容室 高橋紀美世様	季每御供物	滝沢市	福士宏也様	季每御供物
平泉町	(有)平泉電力工業所 千葉 敬様	季每御供物	富良野市	野村農園 野村 隆様	季每御供物
大館市	北秋生コン(株) 加賀谷正子様	季每御供物	平泉町	(有)平泉観光写真社 高橋拓生様	季每御供物
弘前市	鎌田照美様	季每御供物	一関市	(株)ウイッキーンターナショナル	季每御供物
平泉町	岩間智子様(御逝去)	季每御供物	大崎市	(有)若見自動車整備工場 若見正幸様	季每御供物

青森市 石田自動車整備工場 石田 寛様 季毎御供物
 一関市 (株)精茶百年本舗様 衡年茶
 高崎市 大門屋物産(株)様 金色ダルマ
 (順不同)

お悔み
 平泉町 岩間 智子様
 御生前中、長い間、季節毎に御供物奉納いただき
 ました。感謝御礼申し上げます。
 不動堂輪番

中尊寺総門跡 黒門改修
 長年の風雪により腐朽の進んでいた中尊寺参道月見
 坂総門跡に建つ黒門が新造改修され、令和五年十一月
 中旬竣工した。ヒノキアスナロ(青森ヒバ)造 墨塗
 柱高 四一六センチ
 柱径 四六センチ



執務日誌抄

令和四年十二月一日(令和五年十一月三十日)

令和四年

- ◇十二月
 一日 月次大般若(本堂)
 七日 初詣警備会議(管財 於役場)
 薬師会(讃衡威)
 十一日 骨寺村荘園米奉納
 十四日 弥陀会(讃衡威)
 十六日 平泉観光協会理事会(執事長)
 十七日 白山会(本堂)
 十八日 お経を読む会(大長寿ノ光聴)
 二十三日 中尊寺節分講中総会(執事長)
 法務 於平泉文化遺産センター
 二十四日 文殊会(経威)

- 讚衡威運営委員会
 二十六日 平泉町観光振興計画策定委
 員会(総務澄円 於役場)
 二十八日 恒例御供餅つき
 三十一日 午後三時 一山総礼

令和五年

- ◇一月
 一日 ○時 新年祈禱護摩供修行
 七時半 東山町(若水送り)着
 九時 正月祈禱護摩(本堂)
 十時半 総礼
 修正会 釈迦供(本堂)
 二日 九時 正月祈禱護摩(本堂)
 修正会 薬師供(峯薬師 讃衡威)
 午後三時 謡初め(庫裡広間)
 三日 九時 正月祈禱護摩(本堂)
 修正会 山王供(本堂)
 十一時半 元三(会 慈恵供(本堂)
 四日 修正会 薬師供(琉璃光院薬師堂)
 五日 修正会 文殊供(経威)

- 大般若会(利生院弁財天堂)
 寒修行(行者三名、町内托鉢。寒
 の入り)節分)
 六日 修正会 釈迦供・月山御法楽(釈
 迦堂)

- 七日 修正会 白山十一面供(本堂)
 大般若会(本堂)
 修正会 弥陀供(金色堂)
 役席 春の能番組を語る
 八日 修正会 薬師供(讃衡威)
 一字金輪仏・千手観音法楽
 修正会結願
 慈覚会(御影供 本堂)
 お経を読む会(貫首)
 二十九日 文化財防火訓練
 三十一日 平泉町観光振興計画策定委
 員会(総務澄円 於役場)
 平泉観光協会理事会(執事長)
 ◇二月
 一日 月次大般若(本堂)
 三日 節分会(日数心経 本堂)

- 四 日 令和五年厄年祈祷会(護摩供本堂)
- 六 日 平泉町観光審議会(執事長於役場)
- 平泉商工会会員新年交流会(執事長 於武蔵坊)
- 九 日 法儀研修「修正会本壇本尊供」(十日、講師：真珠院 澄順師 光勝院)
- 十四日 涅槃会(本堂)
- 十五日 涅槃会(本堂)
- お経を読む会(瑠璃光院)
- 二十一日 平泉観光協会理事會(執事長)
- 二十二日 平泉町上下水道事業運営協議会(管財晋照 於役場)
- 二十四日 平泉観光協会通常総会(執事長 於エビカ)
- 二十七日 貫首 講話(天台陸奥教区仏教青年会研修会 於光勝院)

- 二 日 平泉町観光振興計画策定委員会(総務澄円 於役場)
- 四 日 毛越寺・無量光院史跡指定百周年記念講演会並びに町内遺跡発掘調査報告会(管財章興)
- 六 日 平泉町文化財調査委員会管財章興 於平泉文化遺産センター)
- 八 日 陸奥教区震災慰霊十三回忌法要
- 十一日 東日本大震災慰霊法要(貫首ほか 於陸前高田市小友地藏尊)
- 東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要(本堂)
- 讚衡蔵運営委員会
- 十五日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会(執事長 於平泉文化遺産センター)
- 十六日 祖師先徳鑽仰大法会総結願法要(貫首、随行秀法 於延暦寺)
- 十八日 中尊寺通りの完成を祝う会(法務宏紹 於エビカ)

- 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂) お経を読む会(地藏ノ秀厚)
- 二十一日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂) 檀徒総代・世話人会総会(執事長、法務ほか 光勝院)
- 二十二日 平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会(総務澄円 於役場)
- 二十三日 中尊寺菊まつり協賛会役員会(光勝院)
- 二十四日 開山会(護摩供 開山堂)
- 二十五日 源義経公東下り行列保存会定期総会(総務澄円 於滝沢魚店)
- 二十八日 平泉町観光審議会(執事長 於役場)
- 平泉文化観光振興基金運営委員会(執事長 於役場)
- 三十一日 研究報告会(岡田文男氏 光勝院)

◇四月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 四 日 御修法「熾盛光大法」(十一

- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 八 日 仏生会(本堂) 日、貫首 於延暦寺)
- お経を読む会(利生院)
- 九 日 天台陸奥教区仏教青年会総会(執事長 於毛越寺)
- 十日 春の藤原まつり交通警備会議(管財 於役場)
- 源義経公東下り行列主要役者記者発表(執事長 於役場)
- 十七日 四寺廻廊事務連絡会(総務五大・亮王 於仙台)
- 二十一日 平泉をきれいにする会総会(管財晋司 於役場)
- 弁慶力餅競技保存会総会(秀厚 於苗蕉館)
- 二十二日 天台宗陸奥教区寺院婦人会定例総会(執事長 光勝院)
- 二十三日 気仙沼市本吉冠者「高衡会」高衡役任命式(執事長 於気仙沼ホテル観洋)
- 二十五日 平泉・一関国際音楽祭実行委員会臨時総会(参拝晋照 於

- ◇五月
- 一日 春の藤原まつり開幕 藤原四代公追善法要(本堂) 稚児行列 郷土芸能奉演(江刺 行山流角懸鹿躍)
- 二 日 開山護摩供(開山堂) 郷土芸能奉演(栗原 栗原神楽) 酒田三十六人衆須藤様来山(総務)
- 春の藤原まつり「源義経公東下り行列」歓迎レセプション(貫首・執事長 於武蔵坊)
- 三 日 源義経公東下り行列(義経公役 俳優 犬飼貴丈 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛
- 二十六日 校友会清掃奉仕(北参道)
- 二十八日 第四十三回「西行祭短歌大会」講師藤原龍一郎氏、コロナ禍を歌人は如何に詠ったか)

- 四 日 古実式三番 能「竹生島」 郷土芸能奉演(胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞) 一関 行山流舞川鹿子躍/胆沢 行山流都鳥鹿踊)
- 五 日 古実式三番「開口」 半能「田村」 郷土芸能奉演(平泉 達谷窟毘沙門神楽)
- 六 日 山王講(山王堂)
- 十五日 國華清話会様来山 村田林蔵画伯を囲む会(執事長 於武蔵坊)
- 十七日 四寺廻廊総会(執事長・総務・法務 於ペリーノホテル一関)
- 十八日 讚衡蔵運営委員会
- 二十日 第二十五回仙台青葉能(於仙台電力ホール)

- 二十一日 曼殊院門跡門主晋山式・宸殿落成慶讃法要(貫首、随行亮 王 於曼殊院(宸殿))
- お経を読む会(葉樹王院)
- 二十二日 中尊寺菊まつり協賛会総会(光勝院)
- 二十三日 平泉観光推進実行委員会幹事会(総務 於役場)
- 二十五日 平泉商工会通常総会(執事長 於平泉文化遺産センター)
- ウエーサカ仏教会総会(法務 章興 於一関松竹)
- 二十六日 小田原市長守屋輝彦氏来山(執事長挨拶)
- 平泉ガイダンスセンター所長八重樫忠郎氏を囲む会(執事長 於武蔵坊)
- 二十九日 天台宗務庁訪問(貫首、随行五大 特別展後援依頼)
- 三十日 御懺法講(貫首、随行五大 於三千院宸殿)
- 平泉芭蕉祭全国俳句大会実

- 行委員会総会(総務普照 於役場)
- ◇六月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 細田博之衆議院議長来山(執事長案内)
- 四日 伝教会(御影供 本堂)
- 五日 平泉観光推進実行委員会総会(執事長 於役場)
- 六日 第一回陸奥教区教学研修会(講師 桑谷祐顕師・八重樫忠郎氏 光勝院)
- 十一日 法華経頓写経会(光勝院)
- 十三日 四寺廻廊法要(貫首他 於毛越寺)
- 十六日 社会を明るくする運動平泉町推進委員会(執事長 於役場)
- 十九日 いわて県南歴史・文化観光推進協議会(総務五大 於平泉文化遺産センター)
- 二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)
- 二十一日 一関警察官友の会総会(執事長 於ヘリーノホテル一関)

- 二十四日 令和五年度ふるさと平泉会総会(執事長 於東天紅)
- 二十九日 第六十二回平泉芭蕉祭全国俳句大会(光勝院)
- 講師・特別選者 渡辺誠一郎氏 平泉世界遺産の日平和の祈り(貫首他 於毛越寺)
- ◇七月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 奉納演奏(ウクレレ奏者 海田 祐樹史氏 本堂)
- 二日 ウエーサカの日勤行(法務 本堂)
- 三日 大聖院訪問(澄円 特別展挨拶)
- 平泉水かけ神輿・ひらいずみ夜祭り・商工会よ市警備会議(法務章興・管財有司 於役場)
- 四日 建立九百年 特別展「中尊寺金色堂」記者発表(貫首他 於東京国立博物館)
- 寛永寺訪問(貫首、執事長)

- 最勝寺訪問(貫首、執事長)
- 七日 平泉一関国際音楽祭実行委員会(普照 於一関なのはなプラザ) 弁慶力餅競技保存会研修会(秀厚 於八つ花)
- 九日 お経を読む会(大徳院)
- 十二日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 十三日 平泉町世界遺産推進協議会 総会(執事長 於平泉世界遺産ガイダンスセンター)
- 十五日 平泉水かけ神輿宵宮祭(五大 於観自在王院跡)
- 富岡八幡宮神輿総代連合会交流会(執事長 於武蔵坊)
- 十六日 平泉総社神輿渡御
- 十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)
- 建立九百年 特別展「中尊寺金色堂」記者発表(貫首 光勝院)
- 二十一日 平泉信友会総会(執事長 於武蔵坊)
- 二十二日 貫首 講話(「虚空説法」 執事

- 長同行 於和賀多聞院伊澤家)
- 平泉総社神輿会「神酒開き」(宏紹 於泉橋庵)
- 二十六日 真珠院得度式(本堂)
- 二十九日 両磐酒造株式会社創業八十年記念祝賀会(章興 於武蔵坊)
- ◇八月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 大文字送り火警備会議(管財 於役場)
- 二日 県庁観光プロモーション室他訪問(総務五大・参拝普照)
- 四日 午後三時半 「平和の鐘」打鐘
- 七日 夏堂籠り(十一日、結衆、開山堂)
- 九日 教育旅行誘致説明会(十日、総務五大 於札幌)
- 十四日 第四十四回中尊寺新能狂言「文荷」
- 能「忠度」
- 十六日 第五十九回平泉大文字送り火

- (強風のため延期。二十日に実施)
- 二十日 毛越寺施餓鬼会(利生院)
- 観福寺施餓鬼会(真珠院 瑠璃光院、観音院、大徳院)
- 二十二日 戸津説法(武覚超師)聴聞(貫首 於大津市東南寺)
- 奉納演奏(玉川学園オーケストラ部 本堂)
- 二十三日 平泉町上下水道事業運営協議会(管財 於役場)
- 施餓鬼会御速夜(本堂)
- 大施餓鬼会・放生会(本堂)
- 蜂神社例大祭(総務五大 於紫波町同神社)
- 二十九日 奉納演奏「オオフジッポ 本堂」
- 三十一日 龍玉寺施餓鬼会(執事長)
- ◇九月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 九日 天台宗陸奥教区第二部檀信徒会ミニ一隅大会(執事長講

- 話 於毛越寺)
 五郎沼薬師神社例大祭(法務
 章興 於紫波町同神社)
 十七日 白符忌(本堂)
 十八日 瑠璃光院後住結婚式(本堂)
 十九日 赤堂稲荷例祭(護摩供)
 二十二日 J R 東日本盛岡支社訪問
 (執事長・総務五大・参拝普照)
 二十三日 秋彼岸会法要(常行三昧 本堂
 お経を読む会(地藏院)
 富岡八幡宮神輿総代連合会
 様来山(執事長挨拶)
 二十八日 浄土宗念仏行脚
 臨時一山会議

- 十三日 平泉観光協会理事会(執事長
 十五日 お経を読む会(積善ノ祐輔)
 十六日 故叡南覺範大僧正(延暦寺
 一山建立院)本葬(貫首 於滋
 賀院内仏殿)
 二十日 菊まつり開闢法要
 二十二日 平泉小学校創立百五十年
 記念式典(管財澄円 於平小体
 育館)
 雷神社例大祭(執事長 於同神社)
 平泉小学校創立百五十年
 記念祝賀会(総務五大 於武蔵坊
 貫首 講演(社会福祉協議会町
 民福祉大会 於エビカ)
 二十四日 第二回陸奥教区教学研修会
 (講師 貫首、円乘院 光勝院広間)
 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
 紅葉銀河(参道の紅葉を照らす
 十一月十二日)
 郷土芸能奉演(江刺 金津流梁
 川獅子躍)



江刺 梁川子供獅子躍

- 二十九日 最明寺様団参
 奉納演奏(弦楽四重奏Mカル
 テット 旧覆笠)
 三十二日 東方書道院様団参(貫首挨拶)

◇十一月

- 一日 秋の藤原まつり開幕
 藤原四代公追善法要
 稚児行列
 郷土芸能奉演(江刺 行山流角
 懸鹿躍)
 二日 郷土芸能奉演(一関 行山流舞
 川鹿子躍)
 お経を読む会(常住ノ亮王)
 郷土芸能奉演(栗原 栗原神楽)
 三日 中尊寺能「狸々」
 謡・仕舞(二葉きらり園、一関喜
 桜会 能舞台)
 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛
 劍舞/胆沢 行山流都鳥鹿踊)
 五日 第五十回ひらいずみ産業まつり及
 び第五十回ひらいずみ芸術文化際
 五十周年記念事業「陸上自衛隊
 第九音楽隊演奏会」(総務五大
 於平泉小学校体育館)
 十日 写経奉納式(光勝院)
 十一日 秋期企画「経蔵法楽〜声明の

- 夕べ」(経蔵)
 十五日 菊まつり表彰式(光勝院)
 十八日 龍巖寺様団参(執事長挨拶)
 二十三日 天台会御速夜(本堂)
 二十四日 天台会(御影供 本堂)
 二十五日 天台宗海外開教五十周年ハ
 ワイ別院参拝(三十日、貫首
 金色堂建立九〇〇年PR
 キャラバン(執事長 於盛岡・
 仙台)

中尊寺〈寺報〉『関山』第二十九号

令和六年(二〇二四)二月二十日

発行 中 尊 寺

(執事長 菅原光聰)

〒〇三九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

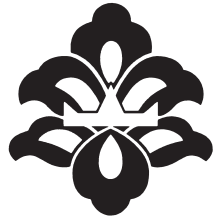
印刷 川嶋印刷(株)

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。
ぜひご利用ください。(https://www.chusonji.or.jp/)。



平泉 虹の秋景

千葉 正吾 氏 提供



〈発行 中尊寺〉